

平成 1 7 年度

独立行政法人国立美術館
京都国立近代美術館

実績報告書

目 次

京都国立近代美術館の概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	6
1. 収集・保管	6
(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	6
(2) 保管の状況	7
(3) 修理の状況	8
2. 公衆への観覧	9
(1) 展覧会の状況	9
「常設展」	12
「京都国立近代美術館所蔵 - 川勝コレクションの名品 河井寛次郎展」（共催展）	15
「村上華岳展」（共催展）	17
「Through the surface: 表現を通して - 現代テキスタイルの日英交流」展（企画展）	19
「20世紀陶芸界の鬼才 加守田章二展」（共催展）	21
「小林古径」展（共催展）	23
「堂本尚郎展」（企画展）	25
「須田国太郎」展（特別展）	27
「ドイツ写真の現在 - かわりゆく「現実」と向かいあうために」展（特別展）	29
「ドイツ表現主義の彫刻家 - エルンスト・バルラハ展」（特別展）	31
「京都国立近代美術館所蔵巡回展」	34
(2) 貸与・特別観覧の状況	38
3. 調査研究	39
4. 教育普及	41
(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況	43
(1) - 2 広報活動の状況	43
(1) - 3 デジタル化の状況	45
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	46
(2) - 2 講演会等の事業	47
(2) - 3 友の会活動	49
(3) - 1 研修の取組	49
(3) - 2 大学等との連携	50
(3) - 3 ボランティアの活用状況	51
(4) 渉外活動	52
5. その他の入館者サービス	54

京都国立近代美術館の概要

1. 目的

当館は昭和38年に国立近代美術館京都分館として発足した。京都市による国立美術館の誘致運動が実現したものであり、当初は京都市の要望もあって工芸に主力を置く美術館として性格付けられたが、昭和42年に独立して京都国立近代美術館となってからは広く美術一般にその所掌範囲を拡げて現在に至っている。なお、昭和61年には新館が竣工開館し、4階における常設展がはじめて可能となって、3階の企画展示とあわせて、展示活動もより活発化し、これとともに常設展に必要な作品の収集をより積極的に行うようになった。

当館に課せられた役割は、現代に繋がる美術の歴史を整理検討し、近代美術の将来の発展のために様々な活動を計画し実行することにある。その活動の分野は絵画、版画、彫刻、工芸、建築、デザイン等から写真に至るまで非常に広く、その活動範囲も日本全国の現代美術の振興に資することを目的とするものと幅広い。また、近代あるいは現代の美術を通じての海外との文化交流も任務の一端である。

以上の諸点を踏まえながら、当館は以下の方針のもとに事業を進めている。すなわち、分館当時、京都市の要望に応じて工芸に重点を置いて来た伝統を継承すること、日本の近代美術史の全体的な流れを展望しつつ主として関西で活躍した美術家を取り上げて、京都を中心とする近代美術の回顧、展望を試みること、さらに変貌を繰り返す現代美術の動向を国際的な視点から把握し、その様相の紹介に努めることである。これらの方針は、例年6～7回の特別展・企画展の開催、常設展の実施及び美術作品や美術資料、図書その他の資料の収集などに反映されている。

2. 土地・建物

建面積	5,000.60m ²
延べ面積	9,761.99m ²
展示面積	2,604.94m ²
収蔵庫面積	1,176.70m ²

3. 定員 18人

4. 予算 518,119,000円

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

実績

1. 業務の一元化

平成13年度から実施したものに加え、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等（リサイクル）
 - (1) 光熱水量

引き続き通知文書の発信、節水・節電の励行等、職員に対し省エネルギーの啓蒙を行った。

平成16年度と比較すると、電気・水道使用量については節約し得たが、ガス使用量は増加した。これは、前年に比べて夏季は猛暑、冬季は厳冬であったことや、石油原価高騰の影響により使用単価が上昇したことが主な要因である。

なお、光熱水料全体の金額比は、昨年度と比較して1.9%減少している。

ア. 電気 使用量	1,180,204kwh (昨年度比 97.86%)	料金	20,428,322円 (昨年度比 93.26%)
イ. 水道 使用量	7,591m ³ (昨年度比 97.20%)	料金	2,928,597円 (昨年度比 95.71%)
ウ. ガス 使用量	128,764m ³ (昨年度比 115.83%)	料金	6,464,614円 (昨年度比 118.64%)
 - (2) 棄物処理量

昨年度に引き続き、一般廃棄物量の減少について、展覧会のディスプレイ製作の際、使用する資材の使用量を抑制し、これに伴い発生する廃棄物量も抑制した。館内LANによる通知文書の発信及びサーバー保存文書の共通利用、会議資料他の両面コピー等により更なるペーパーレス化を推進した。

また、今年度においては、平成15年度以来となる館内の大規模な整理作業を行い、大量に大型ごみ等を処分したため、産業廃棄物については増加している。

ア. 一般廃棄物	18,720Kg (昨年度比 102.3%)	料金	0円 (昨年度比 0%)
イ. 産業廃棄物	22,000Kg (昨年度なし)	料金	741,195円 (昨年度なし)
3. 施設の有効利用

展覧会のイベントとして講演会やシンポジウムを行い、他に団体鑑賞申込時に展覧会解説の申し出があれば、可能な限り、解説を行った。また、博物館実習、公開講座、大学等の学外授業として作品解説等に使用した。施設使用許可書の発行と使用料の徴収を行って、各種団体に対し講堂・会議室等の使用を許可した。その他、作品調査等にも利用した。

講堂等の利用率	37% (136日/365日)
講演会	12回
ワークショップ	2回
シンポジウム	2回
パネル・ディスカッション	1回
ドラマ・リーディング	1回
展覧会解説	12回

博物館実習	8回
公開講座等	13回
学外授業解説	15回
理事会等	3回
その他	66回
講堂等使用許可分	1回(1日/365日)

4. 外部委託

昨年度に引き続き、下記の業務について外部委託を実施した。

- | | | |
|------------------|--------------|-------------------|
| 1. 電気・機械設備運転管理業務 | 2. 清掃業務 | 3. 機械警備業務 |
| 4. 収入金等集配金業務 | 5. レストラン運営業務 | 6. ミュージアムショップ運営業務 |
| 7. 看視業務 | | |

5. O A化

館内LANの整備状況

全館内に整備されており、各職員(含非常勤職員)が1台ずつパソコンを使用できる環境にある。

館内LANにより、サーバー内に設けられている係毎の共有文書ファイルが利用でき、また、電子メールにより事務連絡を行っている。

紙の使用量 230,000枚(昨年度比103.3%)

A4 204,500枚

A3 18,000枚

B4 7,500枚

6. 一般競争入札 一般競争入札件数 6件(総契約件数 57件)

本来、美術館は所蔵作品を多数保有しているという点、また、観覧者サービスという点から、一般競争入札は相応しくないが、経費節減に鑑み、平成16年度に引き続き清掃業務、電気・機械設備運転管理業務他について一般競争入札を行っている。

- 1 京都国立近代美術館建物の清掃一式
- 2 京都国立近代美術館電気・機械設備運転管理委託
- 3 「through the surface:表現を通して」展 展示工作等一式の製造
- 4 「堂本尚郎」展 展示工作等一式の製造
- 5 「須田国太郎」展 展示工作等一式の製造
- 6 「ドイツ現代写真-かわりゆく「現実」と向かいあうために」展 展示工作等一式の製造

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

昨年度と比較して、数値的には増減があるが、全般的に効率化された。

効率化

(1) 省エネルギー等の推進

今年度において、電気料金の契約方法を変更したことにより、使用料金が大幅に削減できた。また、下水道料金を作減するために、空調設備(クーリングタワー)からの蒸発水量について汚水排出量の減量認定の適用を今年度も受けている。

(2) 一般競争入札の導入

今後も業務の見直しを行い、美術館の事業に影響を及ぼさない可能な業務があれば、効率化と経費節減のため、一般競争入札を導入していきたい。

【見直し又は改善を要する点】

エネルギー使用量の削減についてはある程度達成できたが、今後も電気契約の見直し、省エネ機器への更新等効率化に向けてさらに検討・努力する必要がある。

【計画を達成するために障害となっている点】

開館より19年が経過しており諸設備の経年劣化が目立ち、エネルギーの利用効率が悪く、省エネルギーも思うように実施できない。設備を新規更新し得れば省エネルギー・効率化に資するものとする。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(京都国立近代美術館)

近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した収蔵品の充実にも配慮する。

方針

近・現代の美術・工芸・写真・デザインの重要な作品を収集し、各々の時代の文化風土を幅広く検証可能な厚みのあるコレクションを構築し体系化する。国内作品については関西ないし西日本に重点を置き、地域性に配慮する。

大正・昭和の日本画、洋画、工芸のコレクションは充実しつつあるが未完成である。体系的展覧のために補うべき重要作家の作品収集に努力を続ける。1970年以降の関西を拠点として活躍した現代美術家の作品収集が遅れている点を配慮し、今後の重点課題として努力する。

当館日本画の重要コレクションとなった国画創作協会、将来の展覧会を予定しているパンリアル美術協会関係の作品・資料収集の完成を急ぎたい。

実績

1. 購入	77件
2. 寄贈	267件
3. 寄託	920件(平成18年3月31日現在の総数)
4. 陳列品購入費	予算額 124,418,000円 決算額 140,920,000円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

昨年度に緊急を要する作品購入のため国立国際美術館から増額配分を受けた1億円を返済したため平成17年度の購入予算枠は半減したが、その条件下で77点の作品・資料を購入することができた。

玉村方久斗の日本画6点など当初の計画に沿った購入、特に将来開催を予定する展覧会のために都路華香の《達磨》など重要作品を3点、大野倭嵩の《茶と白緑のコラージュ》、富本憲吉の資料などを購入した。過去に開催した展覧会出品作の中から村上華岳《紀文幽霊丸の図》、小出櫓重の《裸女》、横尾忠則の《アダージュ1958》、八木一夫の《翔鳥花壺》《鉄象嵌花壺》など重要作品、東松照明の写真《長崎》シリーズ20点を購入し、調査研究・展覧会開催・収蔵作品の充実という当館の一貫した活動を継続した。また、重要作家でありながら当館が所蔵していなかった麻生三郎の《横になった人》を購入し今後の充実への端緒を付けた。新たに所蔵した作品の点数は少なかったが、いずれも歴史的に重要な作品であり、長期計画に則した従来の収集方針を充実させることができた。

寄贈作品としては岡本神草の素描12点、陶芸家・藤平伸の作品22点、藤田喬平のガラス作品4点など計267点の作品・資料の寄贈を受け入れた。こうした寄贈の実現は、美術館の日常的な努力により、作家・遺族・所蔵家との密接な連携と信頼関係が構築・維持されている成果と考える。

【見直し又は改善を要する点】

昨年度に課題として掲げた、メディアアート及び「1970年代以降の重要な現代美術作品の収集」については、第一次の調査を終え、幾つかの候補作品を検討する段階に至った。来年度から逐次、美術作品購入等選考委員会に諮っていく予定である。今後も1970年以降の関西を中心とした現代美術の展開において重要な作品の調査・収集を続行し、現代美術部門の充実を当館の課題の一つとして努力する。

【計画を達成するために障害となっている点】

昨年度に受けた増額配分の返済のため予算枠が半減し、購入計画に遅れが生じているが、購入作品をさらに厳選することで計画の遅れを回復していきたい。

- * 添付資料 収集した美術作品の件数の推移(事業実績統計表 p.1)
寄託された美術作品の件数の推移(事業実績統計表 p.2)
購入・寄贈美術作品の一覧(事業実績統計表 p.31)

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

(1) 展覧会場

空調実施時間 9:00～17:00

温度 冬季 22 ± 1 夏季 25 ± 1

湿度 冬季 $57 \pm 2\%$ 夏季 $53 \pm 2\%$

* 展覧会により設定は異なる。

* 入館者が入ったときの温湿度管理について

1日4回温度と湿度を測定している。

* 24時間空調を行わない理由

建物の設計上外気の影響を受けにくい構造であるため、閉館後空調を行う必要がない。

(2) 収蔵庫(24時間空調は行っていない)

空調実施時間 9:00～17:00

温度 冬季 21 ± 1 夏季 23 ± 1

湿度 50% (ただし、日本画・染織・漆芸は $57 \pm 2\%$)

* 24時間空調を行わない理由

建物の設計上外気の影響を受けにくい構造であるため、閉館後空調を行う必要がない。

2. 照明 作品を劣化させる紫外線を含まない蛍光灯などの照明を使用している。

3. 空気汚染

年2回ばい煙測定を行うことにより大気汚染物質を排出しないよう監視している。

また、燻蒸は実施していない。

4. 防災 管理室・機械室において自動火災報知器により管理している。時間外は機械警備により管理。

5. 防犯 時間中は監視による巡回警備を行い、時間外は機械警備により管理している。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

保存カルテ作成件数は344件である。

収蔵品の保存及び管理環境の維持充実を図るため美術品の種類、保管場所等の違いにより、温湿度や照明等を適正に管理し、作品の劣化を最小限にとどめるよう努力しており、損傷もなく現在に至っている。展覧会場や収蔵庫は24時間空調を行っていないが、これは建物の設計上外気の影響を受けにくい構造であるため、閉館後空調を止めても作品保存の上で影響はない。むしろ現実には即した省エネ型の保存対応と考えている。

なお、平成15年度からは当館所蔵品による全国的巡回展を開始し、平成17年度も日本画作品を順次入れ替えしながら巡回したため、日本画作品を点検する好機となった。

【見直し又は改善を要する点】

収蔵作品を充実させるべく積極的に取り組んでいるが、現在すでに作品は収蔵庫の許容量を超えており、収蔵品の充実と保管状況の間に無理が生じ始めているため、来年度の概算要求にラックの増設の改修計画を提出しており緊急の課題となっている。将来的には新収蔵庫の建設も必要である。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。

伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

実績

1. 日本画 2件 洋画 2件 版画 0件

緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野毎に計画的に修復を行った。

2. 修理経費 予算額 15,153,000円 決算額 1,185,240円

3. その他

修理報告書は各作品について作成しているが、データベース化については引き続き検討中である。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

収蔵時に修理を必要とするものであっても、そのために格安で購入したり、あるいは寄贈を受けることで、タイミングを逃さず収蔵することに積極的に取り組んでいる。そのため収蔵後数年を経て修理する場合もあるが、各年度当初において、中・長期的にみて緊急を要するもの(傷み具合、早期展示の必要性等)から順に修理を行うべく計画性をもって対応している。今回は須田国太郎の名品「発掘」の修理、収蔵から20年を過ぎ、劣化の激しかった真道黎明「宇宙のロマン」の額装交換、徳力富吉郎「花鳥図」の修理を行った。

なお、修理業者に対しては、修理の方法について美術史的な観点から指導するとともに、鑑賞的な観点から表具や額装についても指導を行っている。

【見直し又は改善を要する点】

平成17年度は修理件数が少なかった理由は、来年度に集中的に修理する作品を調査検討するために時間を費やしたためである。来年度は準備の整った作品を集中的に、相当量の修理を実施するつもりである。また収蔵から20年を経過した写真作品の保存処置の更新も実施したい。

作品の修理については、常に作品の状態を点検する体制にあることが必要であるが、このような仕事を専門的に行うレジストラと呼ばれる学芸職員を持たないため、点検上困難を伴うことがある。また修理についての専門的知識が少ないため、修理技術についての指導が行いにくい状況である。

*添付資料

修理した美術作品の点数(事業実績統計表 p.3)

修理した美術作品の一覧(事業実績統計表 p.56)

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

中期計画

- (1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。
- (1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。
- (1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(京都国立近代美術館)

年6～7回程度

- (1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。
- (1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。
- (1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。
なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。
また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。
- (2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。
- (3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

実績(総括表)

1. 常設展

展示替 19回 目標入館者数 11万人 入場者数 120,813人

2. 特別展・共催展 9回

(中期計画記載回数：年6～7回)

(京都国立近代美術館)

「京都国立近代美術館所蔵 - 川勝コレクションの名品 河井寛次郎展」(平成16年度事業として評価済)

期間：平成17年2月22日(火)～平成17年4月3日(日)

入場者数：17,734人(目標入場者数：1万1千人(うち平成17年度内1千人))

「村上華岳展」

期間：平成17年4月12日(火)～5月22日(日)

日本経済新聞社、京都新聞社と共催

入場者数：27,457人(目標入場者数：3万3千人)

「throughthesurface:表現を通して - 現代テキスタイルの日英交流」展

期間：平成17年4月19日(木)～5月22日(日)

入場者数：12,103人(目標入場者数：1万5千人)

「20世紀陶芸界の鬼才 加守田章二展」

期間：平成17年5月31日(火)～7月10日(日)

朝日新聞社と共催

入場者数：18,636人(目標入場者数 1万6千人)

「小林古径展」

期間：平成17年7月26日(火)～9月4日(日)

日本経済新聞社、京都新聞社と共催

入場者数：41,185人(目標入場者数 2万7千人)

「堂本尚郎展」

期間：平成17年9月13日(火)～10月23日(日)

入場者数：8,132人(目標入場者数 1万5千人)

「須田国太郎展」

期間：平成17年11月1日(火)～12月18日(日)

入場者数：17,953人(目標入場者数 1万9千人)

「ドイツ写真の現在 - かわりゆく「現実」と向かいあうために」展

期間：平成18年1月6日(金)～2月12日(日)

東京国立近代美術館、京都ドイツ文化センター、読売新聞社大阪本社と共催

入場者数：16,230人(目標入場者数 1万1千人)

「ドイツ表現主義の彫刻家 - エルンスト・バルラ八展」

期間：平成18年2月21日(火)～4月2日(日)(36日間：平成17年度は34日間)

朝日新聞社と共催

入場者数：21,587人(うち平成17年度)18,458人(目標入場者数 2万人(うち平成17年度1万9千人))

3.入館者数 284,301人 (目標入場者数266,000人)

「加守田章二展」、「小林古径展」、「ドイツ写真の現在展」、「エルンスト・バルラ八展」については目標を上回る入場者を得たが、「村上華岳展」、「表現を通して - 現代テキスタイルの日英交流」、「堂本尚郎展」、「須田国太郎展」は目標数に達しなかった。知名度の高い「村上華岳」および「須田国太郎」が、展覧会としてはきわめて質の高いものであったにもかかわらず目標に達しなかったことは、今後の展覧会の広報戦略と入場目標の設定に多くの示唆を残した。「ドイツ写真の現在展」および「エルンスト・バルラ八展」はその知名度の低さから不人気が予想されたが、開催後は質の高い展示内容のため多くの新聞批評が掲載されたこと、内容に感動した来館者から口コミによる情報伝達などにより、予想を超えた入館者を得ることができた。全体として平成17年度は目標入場者数を上回っている。

4. 京都国立近代美術館巡回展 4回 70,021人

5. 展覧会開催経費 予算額 106,237,000円 決算額 133,463,253円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

近年、入館者数の獲得が美術館の大きな目標として掲げられ、興行的傾向を強めることで多くの入場者を獲得する美術館が増えている。しかし国立美術館は、日本の美術館の本来あるべき姿を追求し、公立美術館の模範となるべき活動を展開することが使命であると考え。それは各館の性格を踏まえた上で、なおかつ内容のある多様な展覧会を企画、実施することである。その意味で平成17年度は、地域についてはイギリス、ドイツの作品を紹介し、ジャンルにおいては日本画、洋画、彫刻、工芸、デザイン、写真など多岐にわたり、また、時代も近代から現代に及び、概ねバランスのとれた質的にも高い展覧会を開催することができた。今後も幅広く展覧会を企画する予定である。

平成15年度より、法人としての巡回展のほかに館独自の全国巡回展を企画し、平成17年度は所蔵作品から厳選した優品を、水野美術館、豊橋市美術博物館、MOA美術館、新潟県立万代島美術館に巡回した。これは、所蔵作品の活用のみならず、美術作品の優品を見る機会の少ない地域の美術文化向上に有益であるとともに、ナショナルセンターとしての機能を果たす取組みであり、同時に全国の公私立美術館との共同研究のネットワーク化につながる。

【見直し又は改善を要する点】

広報に関して、有料の広告媒体を増やすことは予算的に難しい状況であるが、館独自の企画展の場合、展覧会に関しての「話題性」を強調できればマスコミに取り上げられる機会が増えたのではないかと考える。また、メディアとの協力が得られない場合でも、優れた展示内容であれば来館者の「草の根」的な口コミ効果が侮りがたいものであることを実感した。来館者へのより細かい配慮が必要と考える。

地方美術館を支援する巡回展は重要ではあるが、一方で作品に対する物理的負荷が高く、作品保護の見地から開催回数を減らす方向で調整を進めている。

*添付資料

入館者数の推移（事業実績統計表 p.4）

入場料収入の推移（事業実績統計表 p.7）

「常設展」

方 針

4階展示場約1,200m²を所蔵品及び寄託品による、いわゆる常設展場にあてており、年間19回の展示替を行いながら所蔵作品等の各分野 - 工芸、日本画、油彩画、水彩画、素描、版画、彫刻、写真 - にわたって紹介している。

基本方針としては、近代日本の美術、工芸、写真について、系統的に展示することになっているが、未だコレクションが十全ではないことと、会場が決して広くはないために、十分な紹介は困難な状態にある。この欠を補うための収集活動（購入、寄贈、寄託）は積極的に行っているが、これは長い時間をかけるべき課題といえる。

なお、平成16年度末から常設展の名称を「コレクション・ギャラリー」に改め、これまで行ってきたコレクションによるテーマ設定もより具体化し、新たにコレクション・ギャラリー小企画展として、年間を通じてのテーマ、会期の予告を明確にして、事前の広報を行うようにしている。平成17年度からは企画展との関連展示及び単独で企画したテーマ展示にかえてコレクション・ギャラリー小企画展を中心に実施することとしたい。

実 績

1. 開会期間等

平成17年3月8日～平成17年4月3日（24日間（うち平成17年度3日））
平成17年4月5日～平成17年5月15日（37日間）
平成17年5月17日～平成17年5月22日（6日間）
平成17年5月24日～平成17年6月19日（24日間）
平成17年6月21日～平成17年7月18日（25日間）
平成17年7月20日～平成17年8月7日（17日間）
平成17年8月9日～平成17年9月4日（24日間）
平成17年9月6日～平成17年9月19日（13日間）
平成17年9月21日～平成17年10月2日（11日間）
平成17年10月4日～平成17年10月23日（18日間）
平成17年10月25日～平成17年11月6日（12日間）
平成17年11月8日～平成17年12月4日（24日間）
平成17年12月6日～平成17年12月18日（12日間）
平成17年12月20日～平成17年12月25日（6日間）
平成18年1月6日～平成18年1月29日（21日間）
平成18年1月31日～平成18年2月5日（6日間）
平成18年2月7日～平成18年2月12日（6日間）
平成18年2月14日～平成18年3月12日（24日間）
平成18年3月14日～平成18年4月2日（18日間（うち平成17年度16日））
計305日間（平成18年3月まで）（所蔵品展のみの開催期間48日間）

当館のコレクションの特徴となっている長谷川潔（版画）、河井寛次郎（陶芸）、世界の写真は常に作品を入れ替えつつ、特設コーナーにおいて常時鑑賞できるように努めているが、一方、常設展に魅力を与えるべく小テーマを設定したテーマ展示も行っている。テーマの設定には(ア)3階の企画展との関連で決定するものと、(イ)全く単独で決めるものの2種類に大別でき、主な内容は次のとおりである。

ア 3階の企画展と関連するもの（2回）

- ・堂本印象を中心とした堂本一族（堂本尚郎展）
- ・所蔵作品から ドイツ現代写真（ドイツ写真の現在）

イ 単独で企画したテーマ展示（23回）

- ・初夏の情景
- ・千種掃雲特集
- ・日本美術院の作家たち

- ・大正期 京都日本画の洋風表現
- ・近・現代京都画壇の作家が描く冬の初め
- ・新春を寿ぐ
- ・岡本神草《拳を打てる三人の舞妓の習作》を中心に
- ・^{たびだち}出発の季節に
- ・洋画コレクション作品選
- ・物質としての絵画
- ・日本の近代洋画
- ・近代洋画の名作
- ・西洋の近代美術
- ・ウィリアム・ウェッグマンの写真
- ・印画された形
- ・ユージン・スミスの第二次世界大戦
- ・東松照明の京まんだら
- ・アンセルアダムスの写真
- ・長谷川潔の木版画
- ・谷中安規の版画
- ・浜田知明の版画
- ・日本の現代工芸
- ・現代ガラス
- ・日本の現代陶芸と染織
- ・書と抽象絵画
- ・ヴェネツィア・ピエンナーレの日本人作家

ウ コレクション・ギャラリー小企画展（8回）

- ・国画創作協会の画家たち
- ・現代陶芸の展開
- ・『静物』の表現世界
- ・戦後 海外で活躍した画家たち
- ・ポール・クローデルと京都画壇
- ・京都独立美術協会の画家たち
- ・現代版画の展開
- ・浜田知明の彫刻と版画

2. 会場 4階常設展場

3. 出品点数

136件	188件	177件	162件	152件
97件	188件	172件	177件	179件
136件	157件	183件	145件	192件
177件	171件	179件	150件	
			延 3,118件	

4. 入館者数 120,813人（目標入場者数 110,000人）

うち常設展のみの入場者数 17,607人

5. 入場料金 一般420円（210円）、大学生130円（70円）、高校生70円（40円）、中学生以下無料（ ）内は団体

6. 入場料収入（常設展のみの入場料収入の合計 2,323,560円）

7. アンケート調査

調査期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日（305問）

調査方法	館内2箇所にアンケート箱を設置			
アンケート回収数	1533件			
アンケート結果	・良い	39.3%(552件)	・普通	28.0%(393件)
	・悪い	3.3%(47件)	・無記入	29.3%(411件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

常設展はそれぞれの美術館のコレクションをダイジェストして紹介するものであり、当館においては豊富なコレクションを可能な限り公開することを目指し、年20回近い展示替を行うなど他館には例のない活発な活動を行っている。年間を通じて開催している企画展とも連動したテーマを設けての特設コーナーは好評を得て、企画展の内容を広げる意味でも意義深く、また、単独で企画したテーマ展示の中には「国画創作協会の画家たち」、「現代陶芸の展開」、「ポール・クローデルと京都画壇」など、当館の長年にわたる研究成果を公開する充実した内容となった。

【見直し又は改善を要する点】

「常設展」という名称が常に同じ作品が展示されているとの誤解を一般観覧者に与えることを踏まえ、平成16年度末から名称を「コレクション・ギャラリー」に改め、これまで行ってきたコレクションによるテーマ設定もより具体化し、年間通じてのテーマ、会期の予告を明確にして、事前の広報も行えるよう作業を進めた。以前からコレクション・ギャラリーに関する情報不足を指摘されてきたが、来年度初頭にはホームページの抜本的改良を行い、情報の迅速な公開と広報活動の強化に務める。

コレクション・ギャラリーの会場を閉鎖して壁面の前面補修を行い、壁面の汚れや釘跡を補修し良好な展示環境を回復する工事を来年度初頭に実施する計画を立て準備を行った。またこの機会にコレクション・ギャラリーの構成を全面的に見直し、新しい会場構成によって来年度に臨む。

「京都国立近代美術館所蔵 - 川勝コレクションの名品 河井寛次郎展」(共催展)

方 針

本展は、1890年、島根県安来市に生まれ、1920年京都五条坂で鐘溪窯を開窯し生涯作陶を続けた河井寛次郎陶芸の全貌を紹介する展覧会である。初期の中国や朝鮮の古陶磁の手法を逐った作品や柳宗悦と出会って繰り広げられた中期の民藝作品、後期の自由な造形を追い求めて制作した作品などで寛次郎の世界を紹介するものであり、出品する作品は、1921年、寛次郎に最初に出会ってから1966年没するまで最大の理解者で後援者であった故川勝堅一氏が、寛次郎とともに作り上げたコレクションの中から、当館に寄贈された425点の優品より約250点で陶工河井寛次郎の世界を展観する。

実 績

1. 開会期間 平成17年2月22日(火)～4月3日(日)(36日間:平成17年度は3日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、京都新聞社
協 力 京阪電鉄
4. 出品点数 250件
5. 入館者数 17,734人(目標入場者数 1万1千人)
6. 入場料金 一般800円(700円・560円)/大学生450円(350円・250円)・高校生250円(200円・130円)/中学生以下無料 ()内前売り・団体
7. 入場料収入 3,311,110円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
河井寛次郎陶芸の全貌を紹介する展覧会で、初期の中国や朝鮮の古陶磁の手法を逐った壺や茶碗などの作品や柳宗悦と出会って繰り広げられた中期の民藝作品、後期の自由な造形を追い求めて制作した作品などで寛次郎の世界を紹介する。
10. 講演会等 1回 参加人数 133人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、京都新聞社を中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載、関西元気文化圏参加事業
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
京都新聞社 平成17年1月4日 京都新聞社本社文化事業
京都新聞社 平成17年1月23日 社告
京都新聞社 平成17年2月9日 社告
13. アンケート調査
調査期間 平成17年3月31日(木)～4月3日(日)(4日間)
調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
アンケート回収数 400件
アンケート結果 ・とても良かった 55.5%(222件)・良かった 33.5%(134件)
・まあまあ 5.3%(21件)・あまり良くなかった 0.5%(2件)
・良くなかった 0.3%(1件)・無記入 5.0%(20件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

河井寛次郎の最大の理解者で後援者であった、故川勝堅一氏より寄贈を受けた425点の作品中から、優品250点を展示したことにより、寛次郎の遺族はじめ民芸関係者、愛好家など多くの方々に寛次郎の作陶や考え方を再び思い出す契機となった。また、会期中に行った講演会では、現在まで殆ど目にすることができなかった、寛次郎の在りし日が動画で紹介され寛次郎の深い理解に繋がった。展示においても作品の他に寛次郎および関係者との写真資料を示したことにより寛次郎の全体像に迫ることができたと思われる。当館所蔵のこの寛次郎のコレクションを一般観覧者に周知したことも本展のおおきな意義と言える。

【見直し又は改善が必要な点】

今後も、今回のような展覧会を定期的で開催することが、当館の活動や作品の有効活用に繋がり、当館コレクションギャラリー（常設展示場）で公開している、十分の一程度の作品では感得できない寛次郎の世界を一般観覧者に示すことができる。当館の基幹にあたるコレクションの定期的な公開について今後は考えていかなければならないと思う。

「村上華岳」展（共催展）

方 針

当館では、京都にゆかりのある近代日本画家の展覧会を数多く開催してきた。村上華岳は、開館の年に一度取り上げているが、それから40年以上経って、当時は発見できなかった作品が見つかり、研究も進んだことから、その成果を世に紹介し、華岳の画業を今一度見直すために、今回再び開催することとなった。

実 績

1. 開会期間 平成17年4月12日(火)～5月22日(日)(37日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館 日本経済新聞社 京都新聞社
4. 出品点数 301件
5. 入館者数 27,457人(目標入場者数:3万3千人)

京都ゆかりの作家であり、作品も重文に指定され、切手に使用されるなど露出度が高いことから、3万人の壁を越えられると期待したが、最近大きな個展が開催されていなかったためか、作家自身の知名度が考えていたよりも、低かったらしく動員が伸び悩んだ。が、計2回の展示替えを行ったにもかかわらず、殆んど苦情がなく、沢山の作品を見ることができたと喜ばれ、3回足を運んで下さるお客様が意外に多く、根強いファンがいることを改めて知った。

6. 入場料金 一般1200円(1000円・900円)/大学生900円(700円・500円)・高校生600円(400円・300円)/中学生以下無料 ()内前売り・団体

7. 入場料収入 5,366,160円

8. 担当した研究員数 2人

9. 展覧会の内容

今展の方針により、華岳の代表作を網羅すると共に、これまで世に出ることのなかった新発見の作品や、40年前の展覧会にも出せなかった、久しぶりに公開される作品も展示した。また、華岳の作品は個人の所蔵者が多く、借用がむづかしいため、この機会に出来る限り多くの作品を集めることも心掛けた。結果、総点数301点(書や資料を含む)となり、二度大きな展示替えを行った。

10. 講演会等 4回 参加人数 392人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)

11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布を中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、看板広告、放送、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

日本経済新聞社 平成17年3月19日 「異才の日本画家「村上華岳展」過去最大級の回顧展」

京都新聞社 平成17年4月12日 「孤高の画境たどる 村上華岳展きょう開幕」

京都新聞社 平成17年4月11日 「官能から沈思 孤高の祈りへ 村上華岳展」(太田垣實)

日本経済新聞社 平成17年4月20日 「宿る生命感、古典と融合 村上華岳展」(宝玉正彦)

読売新聞社 平成17年4月20日 「KODOMO楽しむ 芥川記者の展覧会へ行こう 生命のリズムのせて」(芥川喜好)

読売新聞社 平成17年4月25日 「ひたむきに真の「仏画かき」 村上華岳展」(木村未来)

京都新聞社 平成17年4月27日(夕) 「村上華岳展から 祈りの美1 日高河清姫図」(小倉実子)

京都新聞社 平成17年4月27日(夕) 「村上華岳展から 祈りの美2 裸婦図」(小倉実子)

京都新聞社 平成17年4月28日(夕) 「村上華岳展から 祈りの美3 荒原晩照図」(小倉実子)

京都新聞社 平成17年4月30日(夕) 「村上華岳展から 祈りの美4 春泥」(島田康寛)

京都新聞社 平成17年5月2日(夕) 「村上華岳展から 祈りの美5 太子樹下禪那之図」(島田康寛)

朝日新聞社 平成17年5月6日 「村上華岳展 求道者思わせる画風」 (森本俊司)
 毎日新聞社 平成17年5月6日 「「村上華岳展」京都で 仏画・山水 孤高の250点紹介」 (岸桂子)
 京都新聞社 平成17年5月7日 「この世でないもの・神秘・無限 村上華岳に通う近代詩の空気」 (高階絵里加)
 京都新聞社 平成17年5月7日(夕) 「村上華岳展から 祈りの美6 牡丹(絶筆)」 (島田康寛)
 文化庁月報 平成17年2月号 「村上華岳展」 (小倉実子)
 ぎおん 182号 「舞妓をめぐる二人の画家」 (島田康寛)
 趣味の水墨画 平成17年5月号 「展覧会のしおり」
 京都国立近代美術館友の会会報 4号 「美心短信 浄土寺付近 二月乃頃」 (加藤類子)
 京都国立近代美術館友の会会報 4号 「展覧会の見どころ 村上華岳展」 (小倉実子)
 アート・トップ 205号 「偉才(異才)たちの筆遣い 6・7月の展覧会からー」 (野地耕一郎)
 視る 平成17年3-4月号 「村上華岳と“山-六甲山”」 (木村重圭)
 視る 平成17年5-6・7-8月合併号 「祖父村上華岳と愛好家のことなど」 (村上伸)

13. アンケート調査

調査期間 平成17年5月19日(木)～5月22日(日)(4日間)
 調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
 アンケート回収数 423件
 アンケート結果 ・とても良かった 40.9%(173件)・良かった 40.2%(170件)
 ・まあまあ 12.8%(54件)・あまり良くなかった 0.5%(2件)
 ・良くなかった 0.5%(2件)・無記入 5.2%(22件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

華岳作品は、個人所蔵家が多く、作品の借用が非常にむづかしいのだが、当館諸先輩の長年の地道な研究活動が彼等に評価され、信頼を得、かなりの数を集めることができた。京都や関西ゆかりの作家にこだわって、活動してきた当館だからこそ開催可能であった、これまでで最大規模の村上華岳回顧展であり、今後暫くは、同じ規模の展覧会を他館で開催することはできないと思われる。

【見直し又は改善が必要な点】

華岳作品は、図版ではその本当の魅力を知ってもらいにくい作家である。が、作品を実際に見ることが出来る場が非常に限られているために、広報をしても反応が今一つであった。こういう作家の展覧会をする場合、まず会場に足を運んでいただくにはどうすれば良いのか、例えば、事前から計画的に常設展で展示し、興味を持たせるなどの工夫を考える必要がある。

throughthesurface:表現を通して - 現代テキスタイルの日英交流」展（企画展）

方 針

一連の日英テキスタイル交流活動における第3回目のプロジェクト。当館としては第1回プロジェクトの「テキスタイルの発言」展（1998年）に続く参加となる。第1回目第2回目のプロジェクトが作家紹介に力点を置いていたのに対し、本プロジェクトでは日英の作家同士の交流が中心となった。作家たちは3ヶ月間相手国パートナーのもとに滞在し、ともに作品を制作した。それらが本展覧会の出品作となっている。また作家同士の交流は日誌のかたちで随時、展覧会ウェブサイトに掲載され、それを編集したのも会場で紹介された。異なる言語を話し、異なる文化背景をもつ作家たちがお互いに刺激を与えあい、そこに芽生えたアイデアをいかに育てて作品へと昇華させていくか、さらには展覧会が様々な交流を背景としてどのように形づくられていくかを紹介しようとした。

実 績

1. 開会期間 平成17年4月19日（火）～5月22日（日）（31日間）

2. 会 場 京都国立近代美術館1階ロビー及び4階常設展場の一部

3. 主 催 京都国立近代美術館

協 賛 サリー・インスティテュート・オブ・アート&デザイン大学、大和日英基金、国際交流基金
ブリティッシュ・カウンシル、財団法人ポーラ美術振興財団

協 力 全日本空輸株式会社、京阪電鉄

4. 出品点数 24件

5. 入館者数 12,103人（目標入場者数：1万5千人）

本展は、同時に開催されていた「村上華岳」展の観覧券でも鑑賞できることになっていたため、入場目標者数には、村上華岳展の入場目標者数が反映されている。そこに、目標入場者数に届かなかった理由の一端がある。そのため本展を目的とした入場者数だけを考えてみれば、ほぼ目標を達成したのではないかと考えられる。

6. 入場料金 一般420円(210円) / 大学生130円(70円) / 高校生70円(40円) / 中学生以下無料
()内は前売り・団体

7. 入場料収入 591,500円

8. 担当した研究員数 1人

9. 展覧会の内容

日英のベテランおよび若手のテキスタイル・アーティスト14人が7組に分かれ、2003年に3ヶ月相手国パートナーのアトリエに滞在し制作した作家個別作品ないし共同制作作品、合計24件を展示した。さらに各ペアの交流の映像記録「アーティスト日誌」をモニターで紹介した。

10. 講演会等 3回 参加人数 238人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）

11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、交通広告（京阪電鉄、京都市バス・地下鉄）、看板広告、放送、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業

12. 展覧会関連新聞・雑誌掲載記事等

The Japan Times、平成17年5月13日

京都新聞、平成17年5月18日

岡山県立美術館：美術館ニュース 69、2005年夏、「よそさんちの展覧会」（廣瀬就久）

13. アンケート調査 無

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本プロジェクトは、キュレーターが作家と接触し、作家同士が交流し、制作し、展覧会を（さらには関連イベントを）開催する、という一連のプロセスを、人々に提示したことに大きな意義がある。展示された作品は作家たちの生の躍動を感じさせるものであった。交流・制作プロセスを映像と共に日誌形式でウェブ上に公開することは、参加作家たちに自らを裸にすることを要求した。しかし作家たちは、その難しい要求によく応えてくれたと思う。このような交流プロジェクトは、陰でそれを支える人々の協力なしでは実現しない。その難しさ、そして実現できたときの素晴らしさを本展は教えてくれたと思う。

【見直し又は改善が必要な点】

作家同士の交流と制作を目的とする本展では、当然のことながら企画段階で作品は存在していなかった。そのため展覧会が形を為していない段階で予算を組むことになり、当館ではそれが不可能であった。担当した研究員は本展のプロセスに関する情報を随時入手してはいたが、美術館として展覧会参加を決めることができたのは、本展がすでに形をなし、英国を巡回している時であった。このようなプロセスそれ自体を展覧会内容とする展覧会を企画段階からサポートししうるような予算が必要であった。

「20世紀陶芸界の鬼才 加守田章二展」(共催展)

方 針

20世紀後半の日本陶芸界に、異色の才能を燦然と輝かせた陶芸家、加守田章二の没後20年を経ての回顧展。本展は加守田家の協力を得ながら、これまで公開されてこなかった資料や作品を調査研究の上、加守田芸術を再検証し、今日の陶芸界や美術・工芸界にその仕事を問う展覧会であった。

実 績

1. 開会期間 平成17年5月31日(火)～7月10日(日)(36日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、朝日新聞社
後 援 岸和田市 岸和田市教育委員会
協 力 全日本空輸株式会社
4. 出品点数 200件
5. 入館者数 18,636人(目標入場者数 1万6千人)

大阪府岸和田の出身で、京都市立美術大学を卒業したにも関わらず、卒業後の活動が東京を中心に個展を開催していたため関西では関係者を除いてはその存在を忘れ去られていた感がある。今回、没後20数年を経て、関西で初の大きな回顧展を開催することができ、加守田章二の才能と作陶の軌跡を始めて紹介した。それにも関わらず、関係者以外の一般鑑賞者や若手の陶芸家、さらにはジャンルの異なる染織やデザイン関係者も多数訪れ、通常の陶芸の展覧会とは少し趣を異にした。さらに、東京での開催を広報していたが、関東からも多くのファンが来館して、その反響はアンケートや会期中頂いた電話、手紙などで確認できた。関西では知られていない陶芸家の回顧展ではあったが、多くの人々が入場していただいたことは、今後の参考になった。

6. 入場料金 一般1200円(1100円・1000円)/大学生800円(700円・600円)/高学生600円(500円・400円)/中学生以下無料 ()内は前売り・団体
7. 入場料収入 3,582,790円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容

加守田章二(1933-1983)は、大阪府岸和田市に生まれ、20世紀後半の日本陶芸界に、異色の才能を燦然と輝かせた陶芸家である。高校時代から美術の才能を発揮し、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)に進み富本憲吉のもと研鑽を積み、1956年に卒業後、茨城県日立市の日立製作所関連の製陶所を経て、1959年栃木県益子町に窯を借りて独立し、本格的な作陶生活を始めた。1961年、鉄釉作品で日本伝統工芸展に初入選したのを皮切りに、1967年には陶芸家として唯一、第10回高村光太郎賞を受賞、また同年、伝統的な作風からの脱却を考えて日本伝統工芸展への出品をやめ、岩手県遠野市で新しい陶房と単窯で修行僧のように制作に励み、曲線彫文、彩陶など新境地を次々と発表し遠野時代を確立した。1974年には、40歳の若さで、陶芸家初の芸術選奨文部大臣新人賞(美術部門)を受賞。デザインを研究し、独創的な器形を広く展開した加守田の作品は、従来の陶芸の概念を超え、多くの人を引きつけるとともに高い評価を受けた。また、個展の案内状で「自分の外に無限の宇宙を見る様に、自分の中にも無限の宇宙がある」と述べ、自らの理想に向かって精力的に作陶に励んだが、50歳を前に天逝し、多くのファンに惜しまれた。本展は加守田家の協力を得ながら、加守田芸術の世界を約180余点の作品で再検証する回顧展であった。

10. 講演会等 1回 参加人数 120人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、朝日新聞社及びNHKを中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市地下鉄)、看板広告、新聞広告、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

- 朝日新聞 平成17年4月26日 「加守田章二展」
朝日新聞 平成17年5月21日 「加守田章二展 陶器にこめる個性・独創」
朝日新聞 平成17年5月28日 「心の源流探し求め 20世紀陶芸界の鬼才 加守田章二展」(福島建治)
朝日新聞 平成17年5月31日 「土と炎命宿し『加守田章二・陶芸展』に寄せて㊤」(土岐直彦)
朝日新聞 平成17年5月31日 「異色の才能業績を回顧 加守田章二展」
朝日新聞 平成17年5月31日 「土と炎命宿し『加守田章二・陶芸展』に寄せて㊦」(土岐直彦)
朝日新聞 平成17年6月1日 「豊かな作品に感嘆の声 加守田章二展」
中日新聞 平成17年6月7日 「加守田章二の回顧展 造形世界の多様な展開」(浅野徹)
朝日新聞 平成17年6月14日 「土と炎命宿し『加守田章二・陶芸展』に寄せて㊧」(土岐直彦)
毎日新聞 平成17年6月18日(夕) 「2度の転機 『色』を求めて」(岸桂子)
朝日新聞 平成17年6月23日 「加守田章二展で作風解説 『形や文様、理詰めで制作』」
京都新聞 平成17年7月2日 「日本人の源の発掘を意図 20世紀陶芸界の鬼才 加守田章二展」(太田垣實)

13. アンケート調査

調査期間 平成17年7月7日(木)～7月10日(日)(4日間)

調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート

アンケート回収数 413件

アンケート結果 ・とても良かった 60.0%(248件)・良かった 29.1%(120件)
・まあまあ 5.3%(22件)・あまり良くなかった 0.5%(2件)
・良くなかった 0.0%(0件)・無記入 1.9%(8件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

加守田章二は大阪府岸和田市の生まれであるが、京都市立美術大学(現、京都市立芸術大学)を卒業後は、栃木県益子町および岩手県遠野市を作陶の拠点としてきた。そのため、関西では関係者を除いては関東の作家と錯覚されている事が多い。また、加守田は生前から関西では殆ど個展は開催せず、没後も大きな回顧展は関西では開催されなかった。没後20余年を経て加守田の出発点である京都で開催できたことは、加守田芸術を認知してもらうとともに、その業績を考える上で有意義なものであった。さらに今まで、未調査であった資料や作品についても開催館担当者と協力の上、本展で相当な部分調査できたことは大きな成果であった。観覧者も外国からも含め何度も来館する鑑賞者も多くおり、国内外の人々に加守田芸術を理解していただけたことも良い結果であった。カタログも入館者数に対し高販売率を保った。本展は、当館が中心に企画構成し、全国の公立4美術館に巡回する大型巡回展として開催され、現在も巡回中であり、各所での評判も高まると思う。

また、本展を契機に、本展の調査研究成果を用い、講談社より「加守田章二全仕事」という研究書が出版されたことは、今後の展覧会と研究のあり方について示唆に富むものであった。

【見直し又は改善が必要な点】

本展は、大型企画展であり、本館も含め全国の国公立館5館を巡回する展覧会である。そのため、期間が長期間に渡り、所蔵者からの借用に難しい点が多々あった。とくに、作品に関して借用と返却を会場ごとに度々行わなければならないこと、とくに陶芸であるため地震対策も含めた保険金額の増大など、展覧会経費やそれに掛かる時間など多大な負担を伴うものである。これらの、負担を共催者や企画開催館のみで負担することは、今般の状況下では難しい点がある。今後は、大型企画展開催時の、保険料負担、運営方法など検討していかなければならないと思う。

「小林古径展」(共催展)

方 針

昨年、東京の近代日本画壇の基礎を作り、その代表として活躍した横山大観の展覧会を開催した。今回は、当館でも、その次の世代を代表する小林古径の画業を紹介する展覧会を開催し、東京の近代から現代にかけての日本画壇がどのように展開していったのかを見ることとした。当館では古径の代表作《竹取物語》を所蔵しており、また、著作権継承者が京都市内に居られることも、今展開催の契機となっている。

実 績

1. 開会期間 平成17年7月26日(火)～9月4日(日)(36日間)

2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場

3. 主 催 京都国立近代美術館、日本経済新聞社、京都新聞社

協 賛 鹿島建設株式会社、コスモ石油株式会社、大日本印刷株式会社

協 力 山種美術館

4. 出品点数 201件

5. 入館者数 41,185人(目標入場者数 2万7千人)

小林古径は主に東京で活躍した画家であり、昭和32年には亡くなっているので、前田青邨展よりは人が入らないだろうと予測した。が、先に東京で展覧会を行っており、その評判が良かったこともあって、動員が伸びたと考えられる。また、お向かいの京都市美術館で開催されていたルーヴル美術館展との相乗効果も指摘できる。

6. 入場料金 一般1200円(1000円・900円)/大学生900円(700円・500円)/高校生600円(400円・300円)/中学生以下無料 ()内は前売り・団体

7. 入場料収入 8,339,410円

8. 担当した研究員数 1人

9. 展覧会の内容

小林古径の最初期から晩年までの代表作、絶筆を含む124点の作品を展示し、その画業を回顧するもの。本画の他に素描、大下図も展示。東京、京都の両国立近代美術館で開催されるという利点を活かし、東京国立博物館や、山種美術館、永青文庫などの所蔵する、他館では集めがたい優品を展示した。

10. 講演会等 2回 参加人数 194人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)

11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、毎日新聞社を中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、放送、看板広告、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

日本経済新聞社 平成17年4月17日 「近代日本画の名匠 小林古径展」

日本経済新聞社 平成17年6月15日 「小林古径展から 私の一点1 清姫(日高河)」(梅原猛)

日本経済新聞社 平成17年6月16日 「小林古径展から 私の一点2 子犬」(水原紫苑)

日本経済新聞社 平成17年6月18日 「小林古径展から 私の一点3 髪」(森下俊三)

日本経済新聞社 平成17年6月19日 「小林古径展から 私の一点4 阿弥陀堂」(福井爽人)

日本経済新聞社 平成17年7月18日 「近代日本画の名匠 小林古径展 厳しい線 清澄な色彩」

京都新聞社 平成17年7月26日 「高雅な作品一堂に きょうから小林古径展」

朝日新聞社 平成17年7月29日 「裸体意識させぬ「髪」」(森本俊司)

毎日新聞社 平成17年7月30日 「ほっとした気分 画面から」(岸桂子)

京都新聞社 平成17年8月6日 「近代日本画の名匠 小林古径展に寄せて 上 上質で清麗な描線」(畠中光享)

日本経済新聞社 平成17年8月9日 「京都国立近代美術館「小林古径展」 伝統と新しさ 巧みな融合」
(並木誠士)

D ジャーナル 平成17年8月12日号 「京都国立近代美術館「小林古径展」」

京都新聞社 平成17年8月13日 「近代日本画の名匠 小林古径展に寄せて 下 絵を描くことの本当の意味」 (平野重光)

産経新聞社 平成17年8月17日(夕) 「小林古径展 緊張感と温かみが織り成す世界」 (早瀬廣美)

日本経済新聞社 平成17年8月20日 「近代日本画の名匠 小林古径展 鋭いまなざしと生命への讃歌」

文化庁月報 平成17年6月号 「小林古径展」 (小倉実子)

芸術新潮 平成17年9月号 「小林古径 細部のドラマ」 (撮影:鈴木理策)

視る 平成17年5-6・7-8月号 「体感する」小林古径」 (中村麗子)

13. アンケート調査

調査期間 平成17年9月1日(木)~9月4日(日)(4日間)

調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート

アンケート回収数 407件

アンケート結果 ・とても良かった 56.5%(230件)・良かった 35.9%(146件)
・まあまあ 4.4%(18件)・あまり良くなかった 0.5%(2件)
・良くなかった 0.0%(0件)・無記入 2.7%(11件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

古径の描く日本画に、より親しみを感じていただけるよう、展示を三章に分け、それぞれにトピックコーナーを設け、修業時代の素描類、渡欧時のスケッチ帳、本画が出来るまでの制作過程を展示したり、コーナー以外でも、本画と大下図を並べて展示した。また、当館の所蔵品である利点をいかして、教科書に遣われるなど露出度が高く、本展のB2ポスターにも使った画卷《竹取物語》を前・後期通して全場面展示した。元は、《竹取物語》と同様の画卷であったが、現在の所蔵者になってから額装に改められた《清姫》については、額装作品の下に、画卷状の複製品を展示した。

【見直し又は改善を要する点】

今回、所蔵者の都合により、前・後期で作品の殆どが入れ替えた。脆弱な日本画の展覧会を開催するうえで、展示期間の制限は避けて通れないが、なかなか一般のお客様の理解を得にくく、不満を持たれる方もおられたようである。一部の展示替えであれば問題はないが、今後、本展のようなケースは前・後期通し券(割引あり)の発行など、二回見に来て下さる方に便宜をはかる方法を考える必要がある。

「堂本尚郎展」(企画展)

方 針

本展は京都に生まれ、世界的に活躍する画家、堂本尚郎の半世紀にわたる画業の回顧展である。京都の日本画の名門に生まれた堂本は最初、日本画を学ぶが、若き日にパリに留学したことを契機に洋画へ転向し、おりしもパリで勃興しつつあったアンフォルメルという絵画運動の中心的な作家の一人として、華麗なデビューを飾った。堂本は一つの表現にとどまることなく、この後もスタイルを次々に変え、京都からパリ、ニューヨーク、東京と活躍の舞台を変えながら、次々に画期的な表現を生み出した。

本展は18年ぶりの本格的な回顧展として、100点以上の代表作を展示して日本を代表する抽象画家、堂本の画業を紹介した。単なる回顧展ではなく、創造の最前線を今なお探求する画家の姿勢を示すために、本年制作された新作も合わせて展示した。

実 績

1. 開会期間 平成17年9月13日(火)～10月23日(日)(36日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、世田谷美術館
協 力 京阪電鉄
4. 出品点数 118件
5. 入館者数 8,132人(目標入場者数 1万5千人)

日本を代表する抽象画家の大回顧展であったが、抽象絵画の展覧会という先入観が強かったためか、目標とした入場者数を下回る結果となったことは残念であった。しかし絵画という表現が大きな困難に直面する現在において、このような先駆者の画業を紹介した意味は大きく、美術系の大学の団体鑑賞が多くみられた。

6. 入場料金 一般830円(700円・560円)/大学生450円(350円・250円)/高校生250円(200円・130円)/中学生以下無料 ()内は前売り・団体

7. 入場料収入 2,654,550円

8. 担当した研究員数 1人

9. 展覧会の内容

堂本尚郎の画業の全貌を回顧すべく、初期日本画 6点、油彩画 67点、ドローイング 30点に合わせて油彩画新作15点を加えた、計 118点を展示した。

10. 講演会等 1回 参加人数 132人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)

11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、日本経済新聞社、NHK京都放送局、京都新聞社を中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市地下鉄)、看板広告、新聞広告、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

毎日新聞社 平成16年9月14日 「戦後を代表する抽象画家 堂本尚郎展」

朝日新聞社 平成16年9月15日 「変化しつづける作風をたどる 堂本尚郎展」(鶴屋真)

日本経済新聞社 平成16年9月28日 「京都で堂本尚郎展 抽象表現追求の軌跡」

京都新聞社 平成16年10月1日 「透徹する美意識と調和 堂本尚郎展」(太田垣實)

産経新聞社 平成16年9月21日 「果てなき変貌の軌跡 堂本尚郎展」(早瀬廣美)

朝日新聞社 平成16年10月7日 「大胆な画風の変遷、通覧 堂本尚郎展」(森本俊司)

毎日新聞社 平成16年10月7日 「日本画に通じるにじみ 堂本尚郎の最新作」(岸桂子)

日本経済新聞社 平成16年12月10日 「無意識を力に新境地 画家堂本尚郎の軌跡」(白木緑)

朝日新聞社 平成16年12月7日 「回顧2005 美術 私の三点」(高階秀爾)

13. アンケート調査

調査期間	平成17年10月20日(木)～10月23日(日)(4日間)
調査方法	ボランティアによる聞き取りアンケート
アンケート回収数	400件
アンケート結果	・とても良かった 31.5%(126件)・良かった 35.3%(141件) ・まあまあ 22.3%(89件)・あまり良くなかった 4.3%(17件) ・良くなかった 0.3%(1件)・無記入 6.5%(26件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

日本を代表する抽象画家、堂本尚郎氏の大規模な回顧展を18年ぶりに開催したことは、時宜にかなった試みであり、内容も国立美術館における展示にふさわしく、代表作を網羅することができた。またたえず変革する画家の個展として、旧作のみならず画風を一新した新作を展示できたことは画家の創造の本質を理解するうえでおいに資するものであったと考えられる。展覧会に合わせて刊行したハードカバーのカタログは出品作品を中心に、これまでの代表作を網羅し、充実した論考と詳細な年譜、参考文献を付した、決定版とも呼ぶべき内容であった。

【見直し又は改善を要する点】

京都の日本画壇出身の作家であるにも関わらず、入館者数が思いのほか伸びなかった点は見直しを要する。現代美術、特に抽象絵画の展覧会をいかに広報し、来場者の動員につなげるかは重要な課題であり、単に現代美術ファンのみならずいかなる層をプラスアルファとして美術館に呼び込むかという問題については今後も検討する必要がある。

「須田国太郎展」(特別展)

方 針

当館もその業績を高く評価し、当館としても24年ぶり2度目の、京都ゆかりの洋画家・須田国太郎の回顧展として企画し、今回の展覧会では、前回開催以後の調査の成果を盛り込み、特に「洋画家・須田国太郎」の特色を前面に押し、これまで各地で開催された「須田国太郎展」のなかでももっとも多い、未公開作品を含む128点の油彩作品を集めた。さらに須田国太郎は19歳のときに独自に油彩画を描いていたが、同時に謡曲を習いはじめ生涯「能・狂言」にも造詣が深く、数多い演目を描きとめた興味深い素描も残していた。この活動は、とりわけ油彩制作にも強い影響を与えたと思われ、本展覧会では、はじめてこの「能・狂言」の表現に注目し、油彩・素描など28件の作品による単独の章立てを設けて、須田国太郎の個性をきわだたせる構成を採用した。

実 績

1. 開会期間	平成17年11月1日(火)～12月18日(日)(42日間)
2. 会 場	京都国立近代美術館3階企画展示場及び4階常設展示場の一部
3. 主 催	京都国立近代美術館、東京国立近代美術館、京都新聞社
特別協力	大阪大学、大阪大学附属図書館
4. 出品点数	154件
5. 入館者数	17,953人(目標入場者数 1万9千人) 「須田国太郎」については、当館では2度目の開催であり、すでに画家としての評価も高く、一堂に作品が集まる好機だと期待していたが、やはり昨今の時代状況も反映しているのか、作品の質が秀逸にもかかわらず、こうした堅実で地味な絵画が一般大衆から敬遠されているのは残念である。しかしながら、関心の高い観覧者や専門家には好評で、正統な洋画の真髄の紹介、さらには当館がこの画家の評価形成の一端をになってきたことも含め、近い将来に二度と開催することが困難なことを考慮しても、きわめて意義深い展覧会と思われる。
6. 入場料金	一般830円(700円・560円)/大学生450円(350円・250円)・高校生250円(200円・130円)/中学生以下無料 ()内は団体
7. 入場料収入	7,236,520円
8. 担当した研究員数	2人
9. 展覧会の内容	「洋画家・須田国太郎」の魅力を前面に押し出すため、未公開作品を多数含む油彩画を中心に、5章構成で紹介し、これに素描を加え計154点の内容とした。
10. 講演会等	2回 参加人数 130人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報	ポスター、チラシの作成・配布、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、看板広告、新聞広告、放送、パブリシティ情報掲載、関西元気文化圏参加事業
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等	<p>京都新聞 平成17年10月28日 「須田国太郎展特集」</p> <p>毎日新聞 平成17年11月1日 「京都が生んだ近代洋画の巨匠 須田国太郎」鶴谷真</p> <p>読売新聞 平成17年11月2日 「須田国太郎 能楽デッサンを電子化」</p> <p>京都新聞 平成17年11月5日 「須田国太郎展」 太田垣 実</p> <p>京都新聞 平成17年11月25日 「須田国太郎展から(1)」 山野英嗣</p> <p>京都新聞 平成17年11月26日 「須田国太郎展から(2)」 島田康寛</p> <p>日本経済新聞 平成17年11月26日 「須田国太郎の能デッサン」</p> <p>京都新聞 平成17年11月28日 「須田国太郎展から(3)」 山野英嗣</p> <p>京都新聞 平成17年11月29日 「須田国太郎展から(4)」 島田康寛</p> <p>京都新聞 平成17年12月1日 「須田国太郎展から(5)」 山野英嗣</p> <p>新美術新聞 平成17年12月1日 「須田国太郎展」 島田康寛</p> <p>毎日新聞 平成17年12月3日 「重厚な質感 初期の作品にも」 岸桂子</p>

朝日新聞 平成17年12月9日 「須田国太郎展」 森本俊司
サライ 2005年22号 「サライ美術館 京都国立近代美術館『須田国太郎展』より」
現代の眼(東京国立近代美術館ニュース) 2005年12月 2006年1月号
「遺族からみた『須田国太郎』」 須田 寛
「須田国太郎の位置」 山野英嗣

13. アンケート調査

調査期間 平成17年12月15日(木)～12月18日(日)(4日間)
調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート
アンケート回収数 401件
アンケート結果 ・とても良かった 46.4%(186件)・良かった 36.7%(147件)
・まあまあ 10.7%(43件)・あまり良くなかった 1.0%(4件)
・良くなかった 0.7%(3件)・無記入 4.5%(18件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

ひとりの画家の生涯をいかに展覧会として紹介するかは、いわゆる「個展」の中心テーマでもあるが、今回の須田国太郎については、「洋画家・須田国太郎」の特色を前面に押し出すため、これまで各地で開催されてきた「須田展」のなかでも、もっとも数多い油彩作品の出品に勢力を注いだ。また、これまで一般的にも画家の小品作品は、あまり評価の対象にはされてこなかったが、須田国太郎はとりわけこれら小品作品に見逃せない秀作を残しているため、美術館が開催する画家の個展としては、おそらくはじめての試みだと思われる小品を集めた「珠玉の小品」の独立した章を加えたことは、特色ある取り組みだったと思われる。さらに須田は、洋画家としては珍しく謡曲を習い「能・狂言」にも造詣が深く、こうした関心がいかに絵画制作にも影響を与えているかを実作品によって検証するため、単独の「能・狂言」表現の章を設けたことも、これまでの「須田国太郎展」にはない試みであった。同時に「能・狂言」関係の専門家も招いて「講演会と対談」を企画したことも、洋画関係の展覧会としてははじめてのことである。

今回の展覧会の開催は、須田国太郎の遺族の方々との信頼関係、加えて須田についての研究資料の蓄積が豊富な当館ならではの企画内容であり、他館では近い将来にもまず実現し得ないであろう展覧会とって過言ではない。

【見直し又は改善を要する点】

当館の限られた展示スペースでは、油彩大作も数多い須田国太郎の作品を一堂に列べるには、やや手狭であり、最終章として設けた「能・狂言」の展示コーナーは、会場の異なるコレクション・ギャラリーでの設営となり、観覧者の方々の動線、「須田国太郎」の作品群を、緊張感を持続して連続的に鑑賞するという場の設定という意味では、やや不適切な展示方法となったことは否めない。また、調査上ではまだまだ展覧会構成に含めておきたい作品も数多くあったが、展示スペースの都合上割愛せざるをえなかったことも、残念であった。

「ドイツ写真の現在 - かわりゆく「現実」と向かいあうために」展（特別展）

方 針

1920-30年代の近代写真確立期に多大の影響を与えたドイツの写真表現が、今また現代美術の世界で大きな注目を集めている。1990年以降のドイツ写真表現の状況を紹介しその歴史的意味を検証する。

実 績

1. 開会期間 平成18年1月6日（金）～2月12日（日）（33日間）

2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場

3. 主 催 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館、京都ドイツ文化センター、読売新聞社大阪本社

特別協力 ピナコテーク・デア・モデルネ、ミュンヘン

協 力 京阪電鉄

4. 出品点数 68件

5. 入館者数 16,230人（目標入場者数 1万1千人）

一般鑑賞者には馴染みの薄い現代美術の展覧会であり、かつ内容を深く理解するためには歴史や政治についての幅広い知識が要求された展覧会であったが、幅広い年齢層から予想を超えた反響が寄せられた。好意的な新聞評が多数掲載されたことが観客増につながったが、若い世代のリピーター、友人たちからの口コミによる来館者が多かったことも注目に値する。

6. 入場料金 一般650円(550円・450円) / 大学生350円(250円・200円) / 高校生200円 / (150円・100円) / 中学生以下無料 ()内は前売り・団体

7. 入場料収入 6,796,000円

8. 担当した研究員数 1人

9. 展覧会の内容

1990年代に世界的評価を確立した作家5人を個展形式で部屋ごとに展示し、2000年以降に登場した若い作家5人を一つの大きな空間に対比的に展示した。約100点の作品により、現代ドイツの写真表現の歴史的必然性が良く理解できる質の高い展示であった。

10. 講演会等 1回 参加人数 96人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）

11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、交通広告（京阪電鉄、京都市バス・地下鉄）、看板広告、新聞広告、放送、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

京都新聞社 平成17年12月24日 「ドイツ写真のアカデミックな現在」（清水 穰）

産経新聞社 平成17年12月28日 「東西統一後も消えない呪縛」（島 敦彦）

読売新聞社 平成18年1月6日 「現代ドイツ個性的写真」

読売新聞社 平成18年1月7日 「伝わる時代背景」

毎日新聞社 平成18年1月12日 「ドイツ写真の現在」（鶴谷 真）

朝日新聞社 平成18年1月13日 「知の連なりと冒険」（森本俊司）

日本経済新聞社 平成18年1月18日 「現実感取り払い際だつ今」（原 久子）

読売新聞社 平成18年1月21日 「希望を与えた真表現」（河本信治）

読売新聞社 平成18年1月22日 「視覚的な混乱狙う」（河本信治）

読売新聞社 平成18年1月24日 「線の配列歴史を編纂」（河本信治）

読売新聞社 平成18年1月25日 「記憶 模型で実体化」（河本信治）

読売新聞社 平成18年1月26日 「若者に優しい視線」（河本信治）

毎日新聞社 平成18年1月27日 「視覚を揺さぶる違和感」（岸 佳子）

京都新聞社 平成18年1月28日 「見えるのは現実か画像か」（岩本敏郎）

読売新聞社 平成18年2月6日 「独創性で現実見据え」(木村未来)

京都新聞社 平成18年3月1日 「像化した現実の手前に」(鷲田清一)

13. アンケート調査

調査期間 平成18年2月9日(木)～1月12日(日)(4日間)

調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート

アンケート回収数 400件

アンケート結果 ・とても良かった 24.8%(99件)・良かった 47.5%(190件)
・まあまあ 19.0%(76件)・あまり良くなかった 4.3%(17件)
・良くなかった 0.3%(1件)・無記入 4.3%(17件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

大型作品が多かったため、各作家に十分な空間を用意し、中堅作家5人は個展形式の展示とした。また35mm映画作品も含まれ、写真と映画の構造的類似を観客に自然な形で体感してもらうことができた。会場内の作品情報不足を補うために、希望者がある場合は1日3回のギャラリートークを用意し、計26回を実施し延べ298人が参加した。美術系大学に積極的に働きかけ、授業の一環としての鑑賞を促した。

【見直し又は改善を要する点】

ギャラリートークではオーディオガイダンスの受信機を使用して実施したが、10人を超える参加者の場合、一般鑑賞者の動線を妨げる場合も発生した。ギャラリートークについてはより細かい配慮と、経験の蓄積が必要と感じられた。

「ドイツ表現主義の彫刻家 - エルンスト・バルラハ展」(共催展)

方 針

ドイツ表現主義を代表する彫刻家・版画家・劇作家であるエルンスト・バルラハの日本における初めての回顧展。「日本におけるドイツ年 2005/2006年」の一環として、ドイツ側の全面的協力のもとに可能となった。東アジア美術や思想からの影響も指摘されるバルラハ芸術の全容を、代表作を多数含む過去35年間で最大規模の作品点数約180点で紹介する。

実 績

1. 開会期間 平成18年2月21日(火)～4月2日(日)(36日間:平成17年度は34日間)
2. 会 場 京都国立近代美術館3階企画展示場
3. 主 催 京都国立近代美術館、朝日新聞社
- 後 援 ドイツ連邦共和国大使館、京都ドイツ文化センター
- 特別協賛 DEPFA BANK plc
- 協 賛 野崎印刷紙業株式会社
- 協 力 ヤマトロジスティクス株式会社、日本航空
- 助 成 国際交流基金
- 企画協力 エルンスト・バルラハ・ハウス、エルンスト・バルラハ財団
4. 出品点数 183件
5. 入館者数 21,587人(目標入場者数 2万人(うち平成17年度1万9千人))
日本においてほとんど無名の作家であったにもかかわらず、目標を上回る入場者数を得ることができたことは、特筆に値する。来館理由として、展覧会ポスターやちらしといった広報物を見たことや、知人の薦め、といった項目が上げられていた点も展覧会の評価へとつながったと考えられる。また展示替えがなかったにもかかわらず来館リピーターがいたことや、共催展にしては有料入館者数が多かった点も評価されよう。
6. 入場料金 一般1300円(1100円・1000円)/大学生1000円(800円・700円)/
高校生700円/(500円・400円)/中学生以下無料 ()内は前売り・団体
7. 入場料収入 3,810,020円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
ドイツ表現主義を代表する芸術家エルンスト・バルラハの芸術を、彫刻57点、素描75点、版画36点、関連資料14点で紹介した。展覧会には作品所蔵先である、エルンスト・バルラハ・ハウス(ハンブルク)とエルンスト・バルラハ財団(ギュストロー)の全面的な協力を得た。
10. 講演会等 3回 参加人数 369人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 ポスター、チラシの作成・配布、日本経済新聞社・京都新聞社を中心とする広報、交通広告(京阪電鉄、京都市バス・地下鉄)、看板広告、放送、パブリシティー情報掲載、関西元気文化圏参加事業
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
朝日新聞 平成18年1月9日
美術の窓 2月号 平成18年1月
アサヒメイト 平成18年2月号
朝日新聞 平成18年1月31日 「ドイツ表現主義の彫刻家 初のエルンスト・バルラハ展」
文化庁月報 2月号(No.449)平成18年2月 「ドイツ表現主義の彫刻家 エルンスト・バルラハ展」
(池田祐子)

ぴあ 平成18年3月2日号 「エルンスト・バルラハ 人間の愛と哀しみを表現したドイツの彫刻家が日本で初回顧」

朝日新聞 平成18年2月18日夕刊 「ドイツ表現主義 孤高の彫刻家 バルラハ回顧展」(河合哲夫)

朝日新聞 平成18年2月21日 「バルラハ回顧展 存在の根源 重厚に表現」

朝日新聞 平成18年2月22日 「簡略化された形、深い表情 バルラハ展が開幕 素描や版画の連作も紹介」

アサヒメイト 平成18年3月号

アートトップ 平成18年2-3月号 (Vol.208) 「大使に聞く世界文化だより 駐日ドイツ連邦共和国大使
ヘンリク・シュミーゲロー氏」

朝日新聞 平成18年2月24日 「エルンスト・バルラハ展 孤高の彫刻家、おおらかさも」(河合哲夫)

朝日新聞 平成18年2月25日 「エルンスト・バルラハ展 木彫の伝統を近代に再生」(河合哲夫)

芸術新潮 平成18年3月号 「企画者にも選ばせる! My favorite things」(池田祐子)

京都画廊連合会ニュース 平成18年3月号

聖教新聞 平成18年3月1日 「大地に生きる 「エルンスト・バルラハ展」から」(宮下啓三)

日本経済新聞 平成18年3月2日(夕刊) 「ドイツの彫刻家 バルラハ回顧展 仏像に通じる深い精神性」

京都新聞 平成18年3月4日 「エルンスト・バルラハ展 重厚な内面表出、豊かな生命力」(太田垣實)

朝日新聞 平成18年3月4日 「エルンスト・バルラハ展 芸術体験、版画で統合の試み」(池田祐子)

朝日新聞 平成18年3月8日 「エルンスト・バルラハ展 ロシア旅行が転機に」(池田祐子)

産経新聞 平成18年3月8日 「命、苦悩、哀感 木彫に吹き込む エルンスト・バルラハ展」(早瀬廣美)

朝日新聞 平成18年3月10日 「エルンスト・バルラハ展 「人間」の感情 木彫に表現」(加藤義夫)

朝日新聞 平成18年3月12日 「エルンスト・バルラハ展 ナチスの弾圧受け溶解」(池田祐子)

毎日新聞 平成18年3月17日(夕刊) 「バルラハ彫刻展 「命」がこもる木彫、版画など180点」(鶴谷真)

新美術新聞 平成18年3月21日 (No.1083) 「ドイツ表現主義の彫刻家 - エルンスト・バルラハ展」
(池田祐子)

読売新聞 平成18年3月20日 「エルンスト・バルラハ展 魂伝える素朴な木彫」(木村未来)

毎日新聞 平成18年3月24日(夕刊)

毎日新聞 平成18年3月28日 「失意と希望」(京都造形芸大講師、田川とも子)

毎日新聞 平成18年4月3日 「田原由紀雄の心のかたち <弾圧と反体制画家>」

13. アンケート調査

調査期間 平成18年3月23日(木)～3月26日(日)(4日間)

調査方法 ボランティアによる聞き取りアンケート

アンケート回収数 404件

アンケート結果

- ・とても良かった 52.2%(211件)・良かった 35.1%(142件)
- ・まあまあ 9.2%(37件)・あまり良くなかった 0.7%(3件)
- ・良くなかった 0%(0件)・無記入 2.7%(11件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展覧会においても、作品を貸し出したドイツの二つの美術館と当館担当者が、展覧会のコンセプト作りや作品選定など、企画当初から密接に協力しながら開催を実現させた点が非常に評価される。また「日本におけるドイツ 2005/2006」年の一環として、ドイツ大使館および大使自身そしてDEPFA BANKを始めとするドイツ側関係諸機関の真摯な支援がなければ、本展は実現しなかった。その点では、本展は日独の文化交流に大きく寄与したものだと言断できる。また、本展は日本でこれまで一度もまとまった形で紹介されたことのなかったバルラハの日本初の回顧展であるが、作品を年代順に並べた単なる網羅的展覧会ではない。ドイツ側担当者と日本側担当者的一致した意見として、バルラハの回顧展が「日本」で開催される点を重視し、バルラハ芸術の全容を過不足なく紹介するとともに、バルラハと「日本」の関係にも目配りした内容にすることを目指した。その努力は、とりわけ展覧会カタログに掲載された8本の論文に反映されている。さらに、バルラハは彫刻家としてだけでなく、戯曲家としても高く評価されている。本展では、その点をも踏まえ、戯曲家バルラハの側面を、カタログ論文だけではなく、講演会とドラマ・リーディングという形で紹介した。

【見直し又は改善を要する点】

本展において最大の問題であったのは、状態が非常に脆弱な木彫作品のコンディションをどのように維持するか、という点であった。当館の企画展会場は、温湿度が場所により非常に不安定であることが、内部の人間からは何度も指摘されてきた。今回も加湿器を置くなど、可能な限りの調整を行ったが、冬から春にかけての温湿度差が大きい時期の調整は極めて難しく、今後、作品保全の観点から空調設備の抜本的改善が望まれる。

また、当初バルラハ戯曲を、ドラマ・リーディング形式ではなく、舞台形式で上演することを目論んだが、時間的・経費的諸問題から実現できなかったことが残念であった。

京都国立近代美術館所蔵巡回展

「京都国立近代美術館所蔵日本画名品展」

方 針

当館所蔵品の中から京都の日本画の名品や各時代の話題作や時代を画した作品を選び、京都画壇100年の展開を紹介する。

実 績

1. 開会期間 平成17年4月29日(金)～平成17年5月29日(日)(31日間)
2. 会 場 財団法人水野美術館
3. 主 催 京都国立近代美術館、財団法人水野美術館、信濃毎日新聞社、信越放送
後 援 長野県、長野市、長野県教育委員会、長野市教育委員会
4. 出品点数 61 件
5. 入館者数 6,086 人
6. 入場料金 一般・大学生1,000円(900円) / 中学・高校生700円(600円) / 小学生400円(300円) ()内は団体(20名以上)、小中学生は、毎週土曜日無料、身障者手帳をお持ちの方は半額。
7. 担当した研究員数 1人
8. 展覧会の内容 京都国立近代美術館所蔵の中から、京都画壇を代表する作家を中心に41作家・61点の日本画の名品を展示し、京都特有の雅な作風を紹介した。
9. 講演会等 1 回 16名
5月21日 ギャラリートーク 「探検! 日本画の世界」
講師: 宮澤 照江
10. 広 報 信濃毎日新聞を中心とする広報、新聞広告、看板広告、放送、駅前垂れ幕広告、テレビCM、ラジオCM、地元情報誌広報等
11. アンケート調査 無

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

信州では馴染みの薄い「京都画壇」という言葉とその特色を分かりやすく紹介するため、「西の日本画」「東の日本画」など、6つのテーマに分けて展示した。

来館者からはテーマ展示により東西の差がよくわかったと好評であった。

【見直し又は改善を要する点】

広報活動が足りなかったのか、今一つ入館者が得られなかった。

作品数が少ないという来館者の声がいくつかあった。

京都国立近代美術館所蔵巡回展

「京都国立近代美術館所蔵日本画名品展 京都 近代日本画のきらめき」

方 針

当館所蔵品の中から京都の日本画の名品や各時代の話題作や時代を画した作品を選び、京都画壇100年の展開を紹介する。

実 績

1. 開会期間	平成17年6月11日(土)~平成17年7月10日(日)(26日間)
2. 会 場	豊橋市美術博物館
3. 主 催	京都国立近代美術館、豊橋市美術博物館
共 催	中日新聞社
4. 出品点数	56 件
5. 入館者数	10,005 人
6. 入場料金	一般・大学生800円(600円)/高校・中学・小学生400円(300円) ()内は前売り、団体(20名以上)
7. 担当した研究員数	1 人
8. 展覧会の内容	京都国立近代美術館所蔵の京都画壇作家の体系的なコレクションの中から56作家、56点の作品を選びすぐって展示。
9. 講演会等	3 回 230人 6月18日 演題:「京の日本画 - 光と影 - 」 講師: 京都国立近代美術館学芸課長 島田 康寛 6月22日 ギャラリートーク 7月 3日 ギャラリートーク
10. 広 報	ポスター、チラシを中心とする広報、交通広告、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載、等
11. アンケート調査	調査期間 平成17年6月11日~平成17年7月10日(26日間) 調査方法 館内にアンケート箱を設置 アンケート回収数 89 件 アンケート結果 ・良い 70.8%(63件)・普通 27%(24件)・悪い 1.1%(1件) ・無記入 1.1%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

明治~昭和期の京都日本画の変遷や特色ある美術運動を、名品の数々によってわかりやすく紹介できた。各作家の代表作が揃い大変見応えのある内容で、来館者にも好評であった。

【見直し又は改善を要する点】

動線が左回りであったため、屏風や四幅対作品の鑑賞が逆方向になってしまった。

京都国立近代美術館所蔵巡回展

「京都国立近代美術館所蔵 京都日本画の精華」

方 針

当館所蔵品の中から京都の日本画の名品や各時代の話題作や時代を画した作品を選び、京都画壇100年の展開を紹介する。

実 績

1. 開会期間 平成17年7月29日(金)～平成17年8月28日(日)(31日間)
2. 会 場 MOA美術館
3. 主 催 京都国立近代美術館、MOA美術館
協 賛 NHK静岡放送局
4. 出品点数 42 件
5. 入館者数 25,957 人
6. 入場料金 一般1,600円(1,300円)/大学・高校生・中学生800円(500円)/小学生無料
()内は団体(20名以上)
7. 担当した研究員数 1 人
8. 展覧会の内容 京都国立近代美術館が所蔵する日本画から、京都画壇作家と東京の画家の名作42作家42件を対比して展示。
9. 講演会等 無
10. 広 報 MOA美術館を中心とする広報、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティー情報掲載、等
11. アンケート調査 無

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

著名な作家の代表作品を6つに分類し、東京の動きと併せて京都画壇の動きが比較して見られる展示となった。当館展示室の壁付ガラスケースを生かして、1室目は屏風をまとめて展観し、上村松園筆「虹を見る」をはじめその壮観さが評判となった。

全体を6つの章立てに作品を分類し、キャプションやパネルを色分けしたことで、京都画壇の流れが視覚的に印象づけることができた。

夏休みの機会にも恵まれ、親子づれが多く、且つ著名な作品が出陳されたので、美術ファンだけでなく、将来を担う子供達に対しても「近代の日本画」に親しみやすい展観となった。

【見直し又は改善を要する点】

夏休みの期間でもあったので、京都国立近代美術館の所蔵作品に対する著作権の問題をいち早くクリアーし、毎年当館で行っている夏休み子供企画のワークショップ等に連動し、静岡県下の小・中学生に提示、広報等を行えば、小・中学生の生徒さらにその父兄の入場者を更に拡大することが出来たのではないかと。

京都国立近代美術館所蔵巡回展

「京都国立近代美術館所蔵日本画名品展 名画でたどる日本画100年のきらめき」

方 針

当館所蔵品の中から京都の日本画の名品や各時代の話題作や時代を画した作品を選び、京都画壇100年の展開を紹介する。

実 績

1. 開会期間	平成17年9月10日(土)～平成17年10月23日(日)(44日間)
2. 会 場	新潟県立万代島美術館
3. 主 催	京都国立近代美術館所蔵日本画名品展実行委員会、新潟県立万代島美術館、新潟日报社、京都国立近代美術館、新潟日報美術振興財団
後 援	新潟市、新潟県美術家連盟、NHK新潟放送局、BSN新潟放送、NST新潟総合テレビ、TeNYテレビ新潟、NT21新潟テレビ21、ケーブルネット新潟、エフエムラジオ新潟、FMPORT79.0 FMKENTO、ラジオチャット・エフエム新津、エフエム新発田
4. 出品点数	70件
5. 入館者数	27,973人
6. 入場料金	一般800円(700円)/大学・高校生500円(400円)/ 中学・小学生300円(200円) ()内は団体 団体は20名以上、土・日・祝祭日は小・中学生無料、障害者手帳・療育手帳をお持ちの方は無料
7. 担当した研究員数	1人
8. 展覧会の内容	京都国立近代美術館所蔵の京都画壇作家の体系的なコレクションの中から59作家、70点の作品を選びすぐって展示。
9. 講演会等	5回 294人 9月17日 美術鑑賞講座「日本画とは何か - 中国画・韓国画との比較から」 講師：新潟万代島美術館 高景峻 9月19日、25日 実技講座「色紙に描こう」 講師：櫛谷一代 9月24日 篠笛コンサート 演奏：狩野泰一 10月 8日 講演会「京都日本画の100年」 講師：京都国立近代美術館 島田康寛 10月15日 講演会「近代日本画 - 東京と京都」講師：新潟万代島美術館 横山秀樹
10. 広 報	新潟日报社を中心とする広報、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティ情報掲載、等
11. アンケート調査	
調査期間	平成17年9月10日～平成17年10月23日(44日間)
調査方法	館内にアンケート箱を設置
アンケート回収数	179件
アンケート結果	・良い 84.4%(151件)・普通 6.1%(11件)・悪い 1.7%(3件) ・無記入 7.8%(14件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

新潟では馴染みの薄い、京都の作家を多数紹介できた。各作品に作家略歴・作品解説をつけたのが好評だった。展示はおおよそ時代順としたが、その中でテーマごとの小コーナーに区分けしたことでよりわかりやすい展示となった。

【見直し又は改善を要する点】

一部コーナーの順路がわかりづらかった。明治時代の作品のヴォリュームが少なく、戦後作品がやや多すぎた感がある。展示ケースに映りこむ照明が鑑賞の妨げになるとのクレームが多かった。限度はあるが、今後できる限り気をつけて展示したい。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

1. 貸与・特別観覧の件数

貸与	81件(577点)
特別観覧	66件(137点)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

収蔵品の出品依頼は近年とみに数多くなり、その貸出手続きや貸出にともなう点検作業などかなりの時間と労力を要する。この条件下でも当館は、常設展示スペースで十全に所蔵品を紹介できないことを考慮し、作品の保存に支障がない範囲で可能な限り貸出依頼に対応し、収蔵品を有効活用するとともに公私立美術館の活動を積極的に支援しており、この方針は各館から好意的に受け止められている。

平成17年度も倉敷市立美術館ほかを巡回した「池田遙邨展」に15点の池田作品を貸出したほか多くの展覧会に協力し他館の開催する展覧会の充実に貢献した。また平野政吉美術館に長谷川潔版画作品32点を出品するなど、地方美術館の活動や学芸職員の研鑽に協力することでナショナルセンターとしての役割を果たすことに務めた。

【見直し又は改善を要する点】

作品の貸与、特別観覧を積極的に行うこと自体は重要であると考え可能な限り協力しているが、展覧会業務などと平行する形でほぼ毎日のように貸出業務に対応する学芸職員の負担は大きく、ほぼ限界に近づいている。切迫した問題として、作品管理に携わる専門学芸職員の増員が急務である。

*添付資料

貸与件数等の推移(事業実績統計表 p.8)

特別観覧件数の推移(事業実績統計表 p.9)

3 . 調査研究

中期計画

- (1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。
- <1> 収蔵品に関する調査研究
 - <2> 美術作品に関する調査研究
 - <3> 収集・保管・展示に関する調査研究
 - <4> 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
 - <5> 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等
- (1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。
- (2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実 績

1 . 調査研究

(1) 収蔵品の調査研究

新収日本画作品についての調査研究

所蔵洋画作品についての調査研究

所蔵工芸作品についての調査研究

(2) 展覧会のための調査研究

村上華岳に関する調査研究（富山県水墨美術館との共同研究）

日英の染織作家の現状に関する調査研究（英国サリー美術デザイン大学との共同研究）

加守田章二に関する調査研究（山口県立萩美術館、岩手県立美術館、岐阜県現代陶芸美術館との共同研究）

小林古径に関する調査研究（東京国立近代美術館との共同研究）

堂本尚郎に関する調査研究（世田谷美術館との共同研究）

須田国太郎に関する調査研究（東京国立近代美術館との共同研究）

ポール・クローデルに関する調査研究（クローデル没後50年記念企画委員会との共同研究）

エルンスト・バルラハに関する調査研究（東京藝術大学大学美術館 ・ 山梨県立美術館との共同研究）

藤田嗣治に関する調査研究（東京国立近代美術館との共同研究）

富本憲吉に関する調査研究（岐阜県現代陶芸美術館との共同研究）

都路華香に関する調査研究

麻田浩に関する調査研究

他の美術館等における調査研究に対する協力

・河井卯之助に関する調査研究（京都市美術館、京都府文化博物館との共同研究）

美術館教育に関する調査研究

2 . 調査研究費 予算額 2,732,000円 決算額 5,352,121円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中期計画に基づいて調査研究をすすめ、平成17年度のみ調査研究と本年を最終年度とする調査研究については、公刊図書及び展覧会カタログにその成果を発表した。長期的計画に基づく調査研究はさらに継続していく予定である。地方美術館との共同研究も順調に推移し、「村上華岳展」「加守田章二展」「堂本尚郎展」として研究成果を公開した。

【見直し又は改善を要する点】

調査研究及び発表については、今後も積極的かつ多角的に活動を続けたい。しかし、研究職員が少ないため、平成17年度は外部資金による調査研究は実現しなかった。現在の研究職員による新たな研究を平成19年度に立ち上げるよう準備を進めていく。

平成17年度は、来年度に研究紀要に相当する研究成果を公表する新しい形の出版を行う準備に費やした。この成果を受けて、来年度に館内職員のみならず外部研究者にも発表の場を提供できる紀要あるいは研究書の刊行を開始したい。

【計画を達成するために障害となっている点】

平成17年度も積極的に調査研究に取り組んだが、当館のような少人数の美術館においては、担当展覧会、その他の日常業務をかかえながら、さらに調査研究に携わることには限界がある。これまで以上に調査研究活動に取り組むためには、他館に比べて不足している研究職員の増加が課題となる。加えて、書籍、資料等を収納する書架、保存庫が決定的に不足しており、この条件が研究の障害となっている点は否めない。

*添付資料 調査研究一覧（事業実績統計表 p.72）

4 . 教育普及

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キューレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方 針

利用者が主体的かつ創造的に美術館を活用できる環境整備、および利用者の自由な発想を促すための教育セミナー、ワークショップ、広報活動を充実させる。

実 績（総括表）

(1) - 1	資料の収集及び公開	
	収集件数	240件
(1) - 2	広報活動の状況	
	刊行物による広報活動	3種
	ホームページによる広報活動	
	マスメディアの利用による広報活動	
(1) - 3	デジタル化の状況	
	平成17年度にデジタル化した美術作品の件数	500件（目標500件）

(2) - 1	児童生徒を対象とした事業		
	ワークショップ	5回	子ども・保護者 376人
	京都市立銅蛇美術工芸高等学校ARTセミナー「美術入門研修」(同校新入生対象)	1回	93人
	中学校・高等学校教職経験10年期研修「教科指導演習」講座美術科美術	1回	4人
	図工主任研修会「美術館を活用した鑑賞教育について」	1回	36人
(2) - 2	講演会等の事業		
	講演会	12回	1,105人(平成16年度実績 1,147人)
	ワークショップ(友の会会員向け)	2回	198人
	シンポジウム	3回	205人(平成16年度実績 68人)
	パネル・ディスカッション	1回	132人(平成16年度実績 107人)
	ドラマ・リーディング	1回	124人
	ヴィジュアル・エデュケーション講座「自分に合わせて美術館を使いこなす ギャラリー・リテラシーの獲得に向けて」	1回	86人
(2) - 3	友の会活動		
	会員数		332人
(3) - 1	研修の取組		
	美術館・歴史博物館学芸員専門研修会の開催		
(3) - 2	大学等との連携		
(3) - 3	ボランティアの活用状況		
	(登録の人数を含め記載する。)		
	平成17年度は展覧会聞き取りアンケート及び図録等発送作業を実施		延べ272名
	(又は今後の取り組み)		
	来年度は、引き続きボランティアの導入し、新たな分野に取り組む準備する。		
(4)	渉外活動	企業等との連携	
(6)	教育普及経費	予算額 35,173,000円	決算額 36,569,481円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当館はこれまで独自の発想による特色ある美術館教育に積極的にかかわってきた。平成16年11月1日から教育普及を専門とする研究補佐員の採用が実現したことにより、平成17年度はより活発な展開を行うことができた。

以前から大学、高校の授業の現場として美術館を活用するよう関係者を説得してきたが、ようやく各方面から自発的発想による美術館活用の申し出が増えてきた。京都造形大学はオリジナル・プリントの技法の多様性を当館所蔵の写真作品を用いた連続授業を実施、京都精華大学は展覧会の歴史という視点からユニークな美術史の連続授業を行った。教育現場の一部に、美術館を有機的に使うことで斬新な教育を実現する機運が生まれ始めたことは、当館の堅持してきた美術館教育の理念が理解され始めたものとして評価できる。

【見直し又は改善を要する点】

将来的に当教育普及を担当する係、さらには課が設置されることが望ましいが、当面は新採用された研究補佐員を中心に、常設展示とも連動しながら、コレクションを用いた教育活動を開発するための新たな予算処置も必要となろう。来年度はコレクションと連動したより斬新な取り組みに挑戦する。

*添付資料 教育普及件数の推移(事業実績統計表 p.13)

(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実績

1. 収集

件数 240件（購入 41件 寄贈 199件）

2. 公開

公開場所 4階、1階のフリースペースに設置

公開日数 306日間

公開資料数 74件

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

国内外の美術館、大学、関係研究機関との資料交換を継続し、かなりの点数の寄贈図書があった。また、基本的な図書、今後の調査研究、及び展覧会企画に必要な図書類を積極的に購入した。

当館には、構造的に美術図書閲覧室を設ける空間的余裕はないが、1階及び4階のフリースペースにコーナーを設けて一部を入館者に公開するよう努めた。そのため、開館日にはいつでも誰でも閲覧できる体制となり、入館者からは好評であった。

【計画を達成するために障害となっている点】

上記のように、隣接の図書館で当館の展覧会図録の閲覧が可能となったが、建物に空間的余裕がないことと、これに専従する人員がないことが、現在もお閲覧室新設にあたっての根本的な障害となっている。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実績

1. 広報誌名

(1) 年報

発行年月日 平成18年3月発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

料金 無償

配布先 全国美術館・博物館、大学・学校等

(2) 概要

発行年月日 平成17年6月発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

料金 無償

配布先 全国美術館・博物館、大学・学校等

(3) 展覧会に伴う図録の編集・発行

発行年月日 7回発行(編集7回・発行3回)

売価 村上華岳展(編集)2,800円 throughthesurface展(編集・発行)3,800円

加守田章二展(編集)2,500円 小林古径展(編集)2,300円

堂本尚郎展(編集・発行)2,200円 須田国太郎展(編集・発行)2,000円

エルストバルラ八展(編集) 3,000円

配布先 全国美術館・博物館、大学・学校等(無償)

(4) 美術館ニュース「視る」

発行年月日 奇数月発行(発行済み回数6回、発行部数6冊)(年度計画記載発行回数 6回)

料金 無償

配布先 会場内配布、全国美術館・博物館、大学・学校等

(5) カレンダー(展覧会予定表)

発行年月日 平成17年1月発行(発行回数3回)(年度計画記載発行回数3回)

料金 無償

配布先 会場内配布、全国美術館・博物館、大学・学校等

自己点検評価

1. 展覧会の記事掲載

【良かった点、特色ある取組み】

通常、新聞社や美術関係及び一般情報誌の依頼により、プレスリリース、出展作品の写真などの資料を送付し、展覧会の記事掲載をしている。また、展覧会についてより詳しく紹介してもらえるよう取材の受入も適宜実施している。

【見直し又は改善を要する点】

最近、記事掲載の依頼先から、概ね展覧会会期の2、3ヶ月前に料金や講演会などの詳細を知らせてほしいとの要望が多いので、早い時期に回答できるように対応する必要がある。

また、展覧会に関する講演会以外のイベント(ワークショップなど)も、より一層紹介していきたい。

2. ホームページの掲載

【良かった点、特色ある取組み】

当館のホームページの掲載以外に、私設の美術館関係ホームページの掲載を行っているところへ当館の展覧会紹介の掲載を依頼している。

【見直し又は改善を要する点】

現在は、基本的に文字情報を主として掲載を依頼しているが、先方から作品の画像データの掲載を求められることが多く、展覧会を問わず、著作権上問題のないものは可能な限り対応したい。なお、来年度にはホームページのリニューアルを行い、且つ、速報体制を整える。

3. 館パンフレット、展覧会ポスター、などの掲出

【良かった点、特色ある取組み】

館パンフレットや年間展覧会案内、チラシを作成して館内で配布する外、他の美術館、観光案内所などに掲出している。また、生涯学習センターなど来館する客層にあわせて展覧会資料を重点的に掲出するようにしている。

【見直し又は改善を要する点】

ポスター、チラシなどを他の美術館などに掲出及び配布してもらっているが、宣伝効果を上げるためにも部数や送付先について再検討したい。また、年間カレンダーは、先方から早く送付して欲しいとの要望があり、作成時期の再度検討したい。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実績

1. 所蔵作品のデジタル化

平成17年度にデジタル化した美術作品の件数 500件(目標500件)

平成17年度未収蔵作品数 8,029件

平成17年度未デジタル化作品数 4,850件

今後のデジタル化の対応 毎年 500件をデジタル化予定

2. ホームページのアクセス件数 302,860件

ホームページのアクセス件数は、順調に伸び、昨年に比べて5万件を超えることとなった。このアクセス件数の増大は、昨今のデジタル化への国民の高い関心と整備されたインフラ、ネットユーザーの増加が大きな要因と言える。情報をインターネットで検索し、それをを用いる時代が到来したことを物語る一つの例である。ただし、この中にはハッカーやクラッカーの攻撃も入っていることは忘れてはならないのである。

3. デジタル化した情報の公開

HP等による公開件数 60件

平成17年度からは、著作権の切れた作品について、できるだけデジタル化して、独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索において公開している。今後も独立行政法人国立美術館の計画に従い、増大していくものである。また、所蔵作品のカラーポジフィルムが順調にデジタル化しているので、それを基に館内のネットワークで段階的に増やしていくつもりである。しかし、画像公開には著作権という大きな制約もあり、この著作権の許可に基づき館外への公開も合わせて行っていくつもりである。また、来年度ホームページ上に著作権切れの作品を公開するため、平成17年度はその準備を行った。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成17年度もアクセス件数の増大につれてネチケット(ネットワークのエチケット)を守らないハッカーやクラッカーが増え、多くの攻撃を受けた。文部科学省からの指導もあり、セキュリティに対しては、日々チェックしている状態である。このような攻撃を受けても当館のネットワークシステムやサーバを守り抜かなければならず、それらは大変な作業量であった。また、日々、この種の攻撃やウィルスなど、館内、館外のネットワーク管理には多大な労力を使っている。平成17年度も外部からの攻撃から館のネットワーク環境を守れたことは良かったことである。

【見直し又は改善を要する点】

昨年度に引き続き、画像の公開については、所蔵作品のカラーポジフィルムが順調にデジタル化しているので、それを基に、まずは館内のネットワークで段階的に増やしていくつもりである。しかし、画像公開には著作権という大きな制約もあり、この著作権の許可に基づき館外への公開も合わせて行っていくつもりである。セキュリティについては、外部からの攻撃もあるが、政府および文部科学省からの指導通達にあるように内部のセキュリティを確保していかなければならない。来年度は、そのセキュリティについて速やかに実行していくつもりである。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

1. 事業名 子どものためのワークショップ

開催期間

- ア. 平成17年7月6日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)
- イ. 平成17年11月26日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)
- ウ. 平成18年1月7日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)
- エ. 平成18年2月22日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)
- オ. 平成18年3月7日 (1回) (開催場所: 京都国立近代美術館)

参加者数 子ども・保護者 総計376人

担当した研究員(研究補佐員含む) 2人~3人

事業内容 学校現場の教師に美術館の創造的利用を促すとともに、教師と美術館職員が対話しながら、教師自身が発想し運営するワークショップ

2. 事業名 京都市立銅蛇美術工芸高等学校 ART セミナー「美術入門研修」(同校全新入生対象)

開催期間 平成17年4月20日

参加人数 93人

参加した研究員(研究補佐員含む) 3人

事業内容 京都市立銅蛇美術工芸高等学校の生徒としての自覚や、美術の世界への夢や意欲を得てもらう機会となるべく、当館研究員による講義と展覧会鑑賞を行う。

3. 事業名 中学校・高等学校教職経験10年期研修「教科指導演習」講座美術科美術

開催期間 平成17年8月3日

参加人数 4人

参加した研究員(研究補佐員含む) 2人

事業内容 中学校、高等学校で教職経験を積んだ教諭に「美術館の役割と現状」、「作品鑑賞のポイント」、「教材化の工夫」について講義を行い、美術科美術教員としての専門性を高め、学力を伸ばさせるための実践的指導力の向上を図る。

4. 事業名 図工主任研修会「美術館を活用した鑑賞教育について」

開催期間 平成17年8月17日

参加人数 36人

参加した研究員(研究補佐員含む) 2人

事業内容 京都市立小学校下京支部図工主任を中心とした教員と担当校長を参加者として招き、美術館を活用した鑑賞教育のあり方や方法などについて当館研究員が講義を行い、実際に鑑賞体験をしてもらう。

参加した研究員(研究補佐員含む) 2人

事業内容 美術教育の質的向上と美術に関する興味の裾野を広げることに貢献することを目指し、フリーの立場で美術館・博物館を使うヴィジュアル・エデュケーションの実践を積み重ねてきた杉浦幸子さんを講師に迎え、そのヴィジョンと実践例を報告してもらった。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

これまでのこの活動についての当館の取組みは、「美術館が強制するプログラムではなく、教育現場の教師の創造的発想を励まし、その取組みを支援する」という立場を堅持していた。そして、ワークショップの各プログラムについては、現場教師の発想を尊重し、その実現に学芸課職員ができる限りの協力をし、解説を行うといった実践を貫いた。さらに昨年度11月からは教育普及担当の研究補佐員が増員されたことで、同補佐員も常にワークショップに積極的に取り組む体制が平成17年度も継続して整い、より充実した方向性が獲得されたことも有益である。また、こうしたワークショップに熱心な小学校の図工科専任教員の依頼に応え、土曜日の午前中にコレクション・ギャラリー（常設展示場）で、随時親子のための鑑賞会なども開催した。

また、平成17年度は、京都市内唯一の美術関係専門高校である京都市立銅蛇美術工芸高等学校の全新生の来館に際し、事前に担当教諭から、将来美術を専門とする生徒たちの関心を育むような機会の設定について相談を受け、こうした試みはできれば今後も継続して行えるよう美術館としても、あらゆる可能性を含んだプログラムを提供できるよう学校側にも伝達できた点（たとえば休館日などの利用、現代美術の紹介、作品鑑賞の重要性の提言など）は、今後の「美術館と学校現場」とのより高度な連携を構築する上でも、貴重な提案となった。

【見直し及び改善を要する点】

展示会場でのワークショップ自体の開催は有意義であったが、一般の一部の鑑賞者からはワークショップ参加者の会話などが、静かな鑑賞環境を妨害するとして苦情が寄せられた。また、小学生以下の幼児などの鑑賞機会も今後は増加していくと思われるので、その人的対応等も当然せまられるであろう。なお、展示場内で他の鑑賞者にできるだけ迷惑をかけることのないよう音声ガイドレシーバーを導入し、昨年度から継続して美術教師の解説を受けながら作品と対峙する試みを行い、苦情に対する改善を心がけた。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。

それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

- | | | |
|-------------------|---|-------------------|
| 1. 講演会 | 12回（年度計画記載回数：各展示会1～2回） | 別添「4 - (5) 講演会一覧」 |
| 開催期間 | 12（日間） | |
| 開催場所 | 京都国立近代美術館1階講堂 | |
| 参加者数 | 1,105人 | |
| 担当した研究員数 | 5人 | |
| 事業内容 | 一般入館者を対象に展示会に即した内容をわかりやすく講演する。 | |
| アンケート結果（回答数442件） | ・良い 60.2%（266件）・普通 28.1%（124件）
・悪い 2.7%（12件）・無記入 9.0%（40件） | |
| 2. 友の会会員向けワークショップ | 2回 | |
| 開催期間 | （2日間） | |
| 開催場所 | 京都国立近代美術館1階講堂 | |
| 参加者数 | 198人 | |

担当した研究員数 1人

事業内容 友の会会員を対象に美術作品の表装について講話及び実演。

3. シンポジウム 3回(年度計画記載回数: 1回)

開催期間 (3日間)

開催場所 京都国立近代美術館1階講堂

参加者数 205人

担当した研究員数 2人

事業内容 Through the surface: 表現を通して - 現代テキスタイルの日英交流」展、ポールクローデルと京都画壇(コレクション・ギャラリー小企画展)及びパウル・クレー研究公開講演会についてパネリストを招き、討議を行った。

4. パネル・ディスカッション 1回

開催期間 平成17年10月9日(1日間)

開催場所 京都国立近代美術館1階講堂

参加者数 132人

担当した研究員数 1人

事業内容 「堂本尚郎」展に関連し、堂本尚郎の半世紀について、パネリスト3人を招き、討議を行った。

5. ドラマ・リーディング(朗読劇) 1回

開催期間 平成18年4月1日(1日間)

開催場所 京都国立近代美術館1階講堂

参加人数 124人

担当した研究員 1人

事業内容 「エルンスト・バルラハ」展に関連し、バルラハの劇作を対話劇として上演することで、劇作家としてのバルラハの一面を紹介した。

6. ヴィジュアル・エデュケーション講座「自分に合わせて美術館を使いこなす ギャラリー・リテラシーの獲得に向けて」

開催期間 平成17年8月27日、28日

参加人数 86人

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

展覧会に即した講演会や特別シンポジウム、パネル・ディスカッションを実施し、おおむね好評であった。「エルンスト・バルラハ」展での朗読劇は、予想を超える参加者が集まり、この作家の多面的活動を紹介する多大の効果があった。また「ドイツ写真の現在」展での連続ギャラリートークの試みは予想以上の反響があり、作品理解に大きな手助けとなったとの評価を得ることができた。

【見直したまたは改善を要する点】

職員数の少ない体勢ながら他館に劣らぬ活動を続けていると自負するが、各事業を担当する研究員にとっては負担が大きなものとなっている。今後の充実を目指す上ではさらなる人員の確保が急務である。

(2) - 3 友の会活動

実績

- | | |
|---------|---|
| 1. 会員数 | 332人 |
| 2. 活動内容 | 会員向けワークショップを実施。(4月19日実施 参加者 85人)
(5月15日実施 参加者 113人)
バスツアーの実施。(6月12日実施 参加者 20人)
音楽コンサートを実施。(7月31日実施、入場者者 420人うち友の会会員62人)
(10月15日実施、入場者者 350人うち友の会会員4人)
(12月17日実施、入場者者 500人うち友の会会員10人) |
| 3. その他 | 友の会会報の発行(年4回) |

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

近代美術に関心を持つ人々の観賞や研究の便宜を図り、かつ、当館の活動を支援してもらう目的で平成15年度に発足した。一般会員、特別会員、法人会員の3種類の会員制度があり、この一年間で161人の入会者があった。特に、特別会員、法人会員が全体の4分の1を超え、まだ少数ではあるが地域の企業等からの支援を得てきた。また、会員の特典として当館の展覧会以外でも国立美術館(他の3館)の常設展が随時観覧でき、さらに国立国際美術館の企画展が各展覧会ごとに1回観覧でき、また国立博物館(関西の2館)の常設展についても団体料金で観覧できるなど幅広い利用が可能となっている。さらに、今年度より実施した。ワークショップ、音楽コンサート(京都市立芸術大学音楽部と共催)には多数の来場者があり予想以上の結果となった。

【見直し又は改善を要する点】

新たにワークショップ、音楽コンサート(年3回)を実施したが、一般の方の来場者は多数あったが、友の会会員の参加者が少数であり、今後の課題となった。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

実績

1. 文化庁との共催事業

(1) 美術館・歴史博物館学芸員専門研修会の開催

期間 平成18年1月23日~平成18年1月27日(5日間)

開催場所 京都国立近代美術館

参加者数 45人

担当した研究員数 1人

事業内容 公私立の美術館・歴史博物館の学芸員や学芸業務を担当する専門職員等を対象に、学芸業務に

関する専門的知識・技能の向上を図る研修を行い、もって美術館・歴史博物館の活動の充実に資する。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成17年度は美術館・歴史博物館学芸員専門研修会を開催し、関係機関の学芸員等が研修に参加、研究協議に協力し成果があった。

【計画を達成するために障害となっている点】

学芸担当職員研修制度を設けたが、1～2ヶ月では十分な研修が行えず、他方で、十分な研究を行うために長期間研修員が勤務館を離れることは、当該館の仕事に支障を来す恐れがある。内部研修を受けることができない小規模館では尚更である。この点が本制度の課題及び障害となっており、平成17年度に研修希望者がなかった大きな理由と考えられる。

(3) - 2 大学等との連携

実績

1. 博物館実習生

受入期間 1期：平成17年8月22日～平成17年8月26日（5日間）

2期：平成17年8月29日～平成17年9月2日（5日間）

開催場所 京都国立近代美術館

参加者数 10大学20名

担当した研究員数 8人

事業内容 美術館業務全般にわたる実習

2. 講演会（（3）講演会等の事業に前掲）

3. シンポジウム（（3）講演会等の事業に前掲）

5. 音楽コンサート（（2）（友の会活動に前掲）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

1) 博物館実習は、昨年度から受入れ数を従来の半数に厳選した結果、以前にもまして細やかで充実した実習を行うことが出来た。他の公立美術館でも実施可能な大学生を対象とした博物館実習は、法人全体の方針転換により来年度から廃止し、来年度からはナショナルセンターとしての国立館でのみ可能な、より独創的なプログラムによる専門家の養成を目指す活動に転換する。

2) 開催展覧会ごとに1～3回の講演会を継続し、講演者には館職員のみならず外部の識者や研究者を可能な限り招き、幅広い視点からの解説を行っている。アンケート等の反響を見ても、一般聴講者から好評を得ている。

3) 日本美術教育学会と共催した国際シンポジウム「東アジアの美術：現代韓国絵画をどう読むか」「東アジアの鑑賞教育を考える」では、韓国、中国の研究者の発表が日本の研究者へ新たな視点を提供する刺激的なもので

あった。京都大学工学研究科建築学専攻と共催した「ポエジーと建築」セミナーは、学生と最先端の建築家が討論する充実した内容であった。今後もさまざまな可能性を模索していきたい。

- 4) 当館が継続してきた、「教育現場の教師が自ら発想したプラン、手法を美術館で実践する」という理念が、ようやく多くの教師に理解されはじめ、例年を上回る活発な活動が行われた。今後も当館は、美術館を授業の現場として利用するよう積極的に協力していく。

【見直し又は改善を要する点】

美術館のより創造的な利用を、関係各方面とさらに密接に協議・研究し、常識に捕らわれない新しい形を模索していく必要がある。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

1. 活動内容

平成17年度からは、京都国立近代美術館ボランティアとして40名を登録し、ボランティア業務を企画ごとに独自に募集するシステムにした。展覧会の聞き取りアンケート、法人の広報(臨時)、広報物・展覧会図録の発送作業を実施した。31日、延べ272人を動員した。

2. 今後の取り組み

来年度は、17年度に実施した聞き取りアンケート調査を継続するとともに、各種印刷物等の発送業務を更に拡充し、新たな分野として解説ボランティアの準備を進めていきたい。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

平成17年度に開催した7回の展覧会で聞き取りアンケート調査をボランティアにより実施した。7回の展覧会で合計3,337名の方の協力が得られ、目標の調査数を超過達成することが出来た。参加したボランティアの年齢構成がかなり高く、人生経験の豊かな人が多いため、聞き取り時における調査対象とのトラブルもなく、アンケートの記入内容も通常の自由記入型のものより詳しく記載されたものが多く、今後の業務改善に役に立つ有効なものとなった。

また、昨年からはじめた各種印刷物等の発送業務には、延べ183名の参加があり、展覧会の図録、チラシ、ポスター、招待状、記者発表案内、機関誌「視る」等の発送を遅滞なく行うことが可能となり、有効な広報活動が実現できた。

【見直し又は改善を要する取り組み】

上記活動は昨年度の経験を踏まえ、ほぼ予定どおりの業務を処理でき、問題となることはほとんどなかった。この1年間の取り組みにより、当館のボランティアとして登録した方が40名となったが、今後新たな分野に取り組む準備のため、更に登録者数を増やし50名の規模にしたいと考えている。これにより、完成時期の不規則なポスター、チラシ等の発送業務にも臨機応変な対応が出来、ボランティアの緊急募集も可能になってくると考える。

現在は全てのボランティアが同列であるが、将来的には当館の方針に賛同し、協力してくれる人を捜し、ある程度の業務を任せられるリーダーを育成したい。同時に、高度なボランティアコーディネーターの役割を果たせるよう、館職員を必要な研修に参加させ、ボランティアだけに限らず、教育普及業務全体を見通せる者を育成したい。実績のある他館との交流も深めていきたい。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

1. (社)京都市観光協会との連携
 (社)京都市観光協会が実施している「京都修学旅行パスポート」事業に協賛し、小中学生の入場料無料化とは別に「京都修学旅行パスポート」を持参の修学旅行の高校生を団体料金で入場できるようにした。また、受付にて絵はがきのプレゼントを、喫茶にて割引サービスを実施した。
2. 京都織物卸商業組合との連携
 京都織物卸商業組合が実施している「京都きものパスポート」事業に協賛し、きもの産業の活性化及び入館者増を図るため、きもの着用者に特別展入場料金を団体料金で優待。
3. 京都市交通局との連携
 京都市交通局が「スルッと関西」交通網を利用して実施する「京都1dayチケット」事業へ協賛し、当該チケット利用者に対し特別展料金を前売料金で優待。
4. 京都市と京都陸上競技協会との連携
 京都市と京都陸上競技協会とが実施する「京都シティーハーフマラソン」に協賛し、当該マラソン参加者に対し、共催展入場料金を団体料金扱いとした。
5. 京都市産業観光局との連携
 京都市が制定した「伝統産業の日」に因み実施する事業に協賛し、きもの着用者を常設展を無料とした。
6. (財)大阪21世紀協会との連携
 (財)大阪21世紀協会が発行する関西で唯一の英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」に関西地区の美術館、博物館が展覧会情報を掲載し、経済界と連携した広報活動を行い、日本を訪れる外国人の入場者増を図る。
7. 単独開催展覧会の前売券の発売
 民間企業とのタイアップし、利用者のチケット入手の利便性を高めるとともに、入場者増を図った。
8. (財)京都市駐車場公社との連携
 (財)京都市駐車場公社と連携し、岡崎公園駐車場を利用の有料入館者に対し、駐車場料金の割引をした。
9. 朝日友の会との連携
 朝日友の会事業と連携し、会員(朝日メイト)に対し、企画展(一部除く)観覧料金を団体料金扱いとした。
10. (社)日本自動車連盟(JAF)との連携
 (社)日本自動車連盟(JAF)と連携し、JAF会員に対し、常設展及び企画展の観覧料金を団体料金扱いとした。
11. 京都学生祭典との連携
 京都学生祭典「学生の日」に協賛し、期間中、「京都学生祭典クーポン券」を提示の利用者に対し、常設展及び企画展の観覧料金を団体料金扱いとした。
12. 「関西元気文化圏」への参加
 文化庁が提唱した「関西元気文化圏」へ参加し、展覧会ポスター、チラシ等にロゴマークを印刷するなど。
13. 「関西文化の日」への協力
 関西広域連携協議会及び関西元気文化圏推進協議会が実施する「関西文化の日」事業に協力し、11月3日の常設展及び企画展観覧料金、11月6、7日の常設展観覧料金を無料とした。
14. 「国際博物館の日」事業への協力
 (財)日本博物館協会が実施する「国際博物館の日」事業に協力し、5月18日の常設展料金を無料とした。

15. トマト倶楽部との提携

京都新聞社のトマト倶楽部事業と提携し、会員に対し、企画展観覧料金を団体扱いとした。

16. (株)京阪カード、(株)阪急カード、(株)リロクラブとの連携

(株)京阪カード、(株)阪急カード、(株)リロクラブと連携し、各会員に対し、常設展及び企画展の観覧料金を団体料金扱いとした。

17. 京都市地下鉄東西線「東山駅」に案内用看板を掲出

最寄り駅にあたる京都市地下鉄東西線「東山駅」に案内用看板を設置した。また、案内には日本語による通常の案内他、英語、中国語、ハングル語を併記し、展覧会ポスターも掲出している。

18. 京都市美術館との連携

京都市美術館の間で、当館及び京都市美術館の両方で展覧会を観覧した利用者に対して、後で利用した展覧会の観覧料金を団体料金及び前売料金扱いする連携体制を実現。

19. 「教育・文化週間」事業への協力

「教育・文化週間」事業に協力し、日本に滞在する留学生が学外活動や学習として利用できるよう、「痕跡展」招待券を京都、大阪、兵庫、滋賀、奈良の国際交流センター等に提供した。

20. 「ミュージアムぐるっとパス・関西2005」事業への協力

関西の美術館・博物館等約60館で実施する共通入館券事業(常設展は無料)「ミュージアムぐるっとパス・関西2005」に参加した。

21. 大学等と協定を締結し、学生に対する割引を実施。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

美術館事業を充実させるためには、企業、財団等からの研究・展覧会等への助成、後援、協力を得るなど、積極的な企業等と連携を図ることが必要である。そのため、広く企業等に対する美術館事業への理解の促進を図り、有効な事業展開、支援を得られるよう渉外活動に努めた。昨年度に引き続き全国的に活動する日本自動車連盟(JAF)や、朝日友の会、京阪カード、阪急カード、リロクラブ、京都市美術館との連携が実現したことにより、入場者数の増加を図ることが出来た。

また、関西広域連携協議会等が実施する「関西文化の日」事業に協力し、文化力の向上に寄与できた。さらに、日本自動車連盟(JAF)とのタイアップを円滑に進めるための駐車場の問題も、京都市駐車場公社との連携によって解消された。

【見直し又は改善を要する取組み】

全国的あるいは地域的に活動する企業等との連携には力を注いできたが、展覧会の割引制度の告知のための、各誌への掲載時期が入場者の動員に影響するため、今以上のタイムリーさが要求される。

【計画を達成するために障害となっている点】

企業等との連携による割引の種類が増えることによって、窓口業務が煩雑になりトラブルの要因となる恐れがある。

5 . その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実 績

- 1 . 高齢者・身体障害者のための施設整備等 (1)-1
 - 障害者トイレ 1 箇所 (1 階 1 箇所)
 - 障害者エレベータ 1 基
 - 段差解消 (スロープ) 3 箇所 (正面玄関、喫茶室)
 - 貸出用車椅子 5 台 (座席昇降機能付き 2 台を含む)
- 2 . 夜間開館等の実施状況 (1)-3
 - (1) 夜間開館実施状況
 - ア . 開催日数 1 8 日間 (4 月 15 日 ~ 9 月 2 日 までの特別展・共催展開催期間中の金曜日午後 8 時まで)
 - イ . 入館者数 2 , 2 5 9 人 (総入場者数 4 0 , 3 3 1 人、夜間開館入場率 8 . 2 %)
 - ウ . 実施日 4 / 1 5 , 2 2 , 2 9 5 / 6 , 1 3 , 2 0 6 / 3 , 1 0 , 1 7 , 2 4
7 / 1 , 8 , 2 9 8 / 5 , 1 2 , 1 9 , 2 6 9 / 2
 - (2) 小中学生の入場料の低廉化

昨年に引き続き、平成 1 7 年度開催の全ての共催展で小中学生の無料化が実現した。
 - (3) (2) 以外の入場者料金の取り組み方

昨年に引き続き、常設展の学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金の低廉化を実施するとともに、特別展の高校生料金の低廉化を実施した。
 - (4) その他の入館者サービス
- 3 . アンケート調査(1)-3
 - 調査期間 平成 1 7 年 4 月 1 日 ~ 4 月 3 日 (3 日間) 「河井寛次郎」
平成 1 7 年 5 月 1 9 日 ~ 5 月 2 2 日 (4 日間) 「村上華岳」
平成 1 7 年 7 月 7 日 ~ 7 月 1 0 日 (4 日間) 「加守田章二」
平成 1 7 年 9 月 1 日 ~ 9 月 4 日 (4 日間) 「小林古径」
平成 1 7 年 1 0 月 2 0 日 ~ 1 0 月 2 3 日 (4 日間) 「堂本尚郎」
平成 1 7 年 1 2 月 1 5 日 ~ 1 2 月 1 8 日 (4 日間) 「須田国太郎」
平成 1 8 年 2 月 9 日 ~ 2 月 1 2 日 (4 日間) (4 日間) 「ドイツ現代写真展」
平成 1 8 年 3 月 2 3 日 ~ 3 月 2 6 日 (4 日間) (4 日間) 「エルンスト・バルラ八展」
 - 調査方法 各展覧会会期中の 4 日間にボランティアによる聞き取りアンケートを実施した。また、館内にアンケート箱を設置しており、入館者の意見を随時受け入れている。
 - アンケート回収数 3 , 2 3 5 件
とても良かった 4 6 . 2 % (1495 件)、良かった 3 6 . 8 % (1190 件)

アンケート結果 まあまあだった 11.1% (360件)、あまり良くなかった 1.5% (49件)
良くなかった 0.3% (8件)、無記入 4.1% (133件)
立地、施設、展示内容については概ね70点以上の評価を得たが、観覧料金、接客で60点程度の評価であった。

5. 一般入館者等の要望の反映 (2)

京都国立近代美術館では、常時アンケート調査を実施しており、苦情、要望等への迅速な対応のほか、入館者のニーズの把握に努め、例えば、作品内容を解説した説明パネルやキャプションの文字を見やすく大きくしたり、館内案内表示の増設等を行った。

6. レストラン・ミュージアムショップの充実 (3)

喫茶室では展覧会ごとのテーマメニューの提供を行った。また、喫茶室の禁煙化を実施している。ミュージアムショップでは、お客様の要望に応えるため、ワンコインで購入可能な廉価な商品を販売するなど、幅広い商品の開発に取り組んでいる。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

京都市駐車場公社と連携し、岡崎公園駐車場を利用の有料入館者に対し、駐車場料金の割引をしている。

隣接の京都府立図書館と協力し、過去の展覧会図録が府立図書館において閲覧できる。

入口に各種割引の情報案内、3階会場内に観覧順路の表示、4階ロビーに眺望案内写真と周辺地図を設置するなど、入場者に対する案内表示を充実させ、利便性の向上に努めている。

また、美術館敷地の入口に点字板を設置したり、インフォメーションに老眼鏡を3種用意するなど、バリアフリー化の推進にも取り組んでいる。

外国人入館者への対応として、8カ国語の館案内リーフレットを常備している。

【見直し又は改善を要する取組み】

一般入館者の要望等を把握するために、常時アンケート調査を実施しているが、今後も苦情、要望等に対して迅速に対応していきたい。